津和野町埋蔵文化財報告書

津和野城下町　祇園町遺跡

1999年3月

津和野町教育委員会

序

山陰の小京都として知られる津和野町には、恵まれた自然環境の中で先人たちが生活していた証である貴重な文化財が数多く残されています。そして、現在の津和野の町並みは、江戸時代に整備された城下町が基礎となっています。

今回、津和野郵便局庁舎新築工事に先だって発掘調査をおこない、津和野城下町遺跡で初めての本格的な町屋跡の発掘調査となりました。今回の調査は小規模なものでしたが、城下町の成立期を知る手がかり、幾度にもわたる大火を裏付ける焼土層、大量に廃棄された陶磁器の一括資料など、これまで知られていなかった新しい事実が発掘調査を通じて次々と明らかになってきました。

本書が埋蔵文化財の理解・普及に寄与し、学校教育・社会教育・学術研究の一資料として活用いただければ幸いです。最後になりましたが、発掘調査に際して多大なご理解・ご協力をいただきました中国郵政局及び関係各位に対し、心より厚く御礼申し上げます。

平成11年3月16日

津和野町教育委員会

教育長　斎　藤　数　弘

例言

1．本書は、津和野町教育委員会が１９９７・１９９８（平成９・１０）年度に中国郵政局から委託を受けて実施した、島根県鹿足郡津和野町大字後田字祇園町に所在する祇園町遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査にあたっては、下記の方々に文献・陶磁器・遺構など多くの内容をご指導いただいた。この場を借りてお礼申し上げます。(敬称略)。

　鈴川　兼光（津和野町文化財保護審議会会長)、村上　　勇（広島県立美術館)、渡辺　一雄（梅光女学院大学）

3．調査にあたっては、下記の方々にご協力いただいた。また、近世城下町発掘調査実施の関係機関の方々には多数の報告書をご恵送いただいた。この場を借りてお礼申し上げます。(敬称略)。

　池田邦郎、河野晃、古賀信幸、斎藤昌雄、財間至宏、須佐町歴史民俗資料館、谷口哲一、西尾克巳、乗安和二三、根鈴輝雄、藤本隆之、増野晋次、松井章、守岡正司、柳浦俊一、湯村功

4．自然科学分析業務は、環境考古研究会　金原正明・金原正子氏に依頼し、玉稿を賜った。この場を借りてお礼申し上げます。

5．本書に用いた方位は、第１・２図は真北、第５図以下は国土調査法第Ⅲ座標系に基づく座標北である。建物跡の主軸は座標北からの値である。

6．遺構番号は各区ごとの通し番号とし、遺構の種別・時期差による分類はしていない。本書中に用いた記号Ｓは、遺構の略号としてもちいた。(例：４－Ｓ１、４区１号遺構)

7．調査に伴う記録類及び出土遺物は、津和野町教育委員会で保管している。

8．本書は山本・永田・椋木の協力のもと、宮田が編集にあたった。

目次

Ⅰ．はじめに……1
Ⅱ．位置と歴史的環境……1
Ⅲ．調査の概要……3
Ⅳ．まとめ……31
[付編]祇園町遺跡出土遺物の自然科学分析……(金原正明、金原正子)34

Ⅰ．はじめに

１．調査の経過

平成９（1997）年４月、中国郵政局より津和野郵便局庁舎新築工事地内の埋蔵文化財の有無、及びその取扱いについての照会が津和野町教育委員会になされた。これに対して津和野町教育委員会では、対象地に近世の津和野城下町遺跡が存在している可能性があることから、試掘調査による確認が必要である旨を回答した。同年５月６日～16日、当時駐車場であった部分について２カ所の試掘調査（１・２区）をおこなった結果、１区で近世の焼土面６面を確認、２区で近世前半期に相当する可能性の高い埋桶遺構などを確認し、城下町遺跡が非常に良好な状態で遺存していることが明らかとなった。その後、中国郵政局と町教委で協議をおこない、遺跡発見通知・遺跡発掘通知を提出することとなり、郵便局庁舎取り壊し工事終了後の平成10（1998）年３月に本発掘調査をおこない、翌年度に発掘調査報告書を作成することとなった。

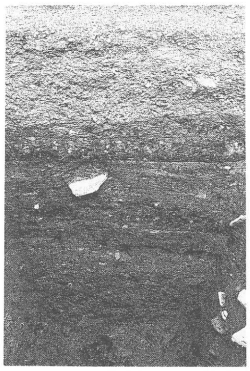
発掘調査（３～６区）は同年３月３日より開始し、３月26日に終了した。調査期間中、発掘調査説明会を開催したところ、荒天にもかかわらず多くの見学者の来訪があった。また、発掘調査終了後の平成10年度前半には、町民センターロビーで発掘速報展を開催した。

２．調査体制

今回の調査体制は、下記のとおりである。

調査主体	津和野町教育委員会	教育長	斎藤　数弘
事務局	〃	教育次長	益成　　馨
	〃	文化係長	広石　　修
	〃	文化係	山本　博之
調査担当者	〃	文化係	宮田　健一
調査員	〃	嘱　託	永田　茂美
調査補助員	〃	臨時職員	椋木　牧子
	〃	〃	藤井　晴子

発掘作業員　岩本吉雄、大野浩也、大山和秀、岡田忠良、落合郁雄、斎藤やす子、長嶺春夫、柳井清、山本幸正、和崎正



試掘１区東壁土層断面

試掘２区埋桶遺構（2-SI）

発掘調査説明会

Ⅱ．位置と歴史的環境

祇園町遺跡は、現在の津和野町市街地がある盆地の北端、標高１５４ｍの場所にある。

中世津和野の領主吉見（よしみ）氏は、弘安５（１２８２）年に元寇再防備のため能登国から津和野北部の木部（きべ）地区に入り、その後１４C代に津和野城を構えたと伝えられている。中世の津和野城の大手口は近世以降の大手口とは反対側の喜時雨（きじゅう）にあったと伝えられ、祇園町遺跡のある大字「後田（うしろだ）」は城の後ろであったことを指し示すものと考えられている。これまでの発掘調査により、津和野城旧大手であった西側の喜時雨遺跡・高田（たかた）遺跡で中世武士団のものと見られる遺跡を確認してい

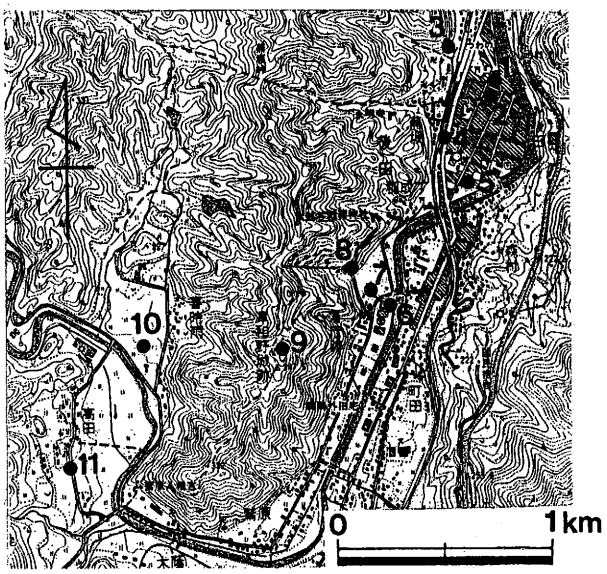


図１　祇園町遺跡位置図（1/35,000）

1. 祇園町遺跡
2. 幸盛寺跡
3. 吉見少将正頼夫人の墓
4. 山根遺跡
5. 津和野藩校養老館
6. 旧津和野藩邸馬場先櫓
7. 津和野藩御殿跡
8. 興源寺跡
9. 津和野城跡
10. 喜時雨遺跡
11. 高田遺跡

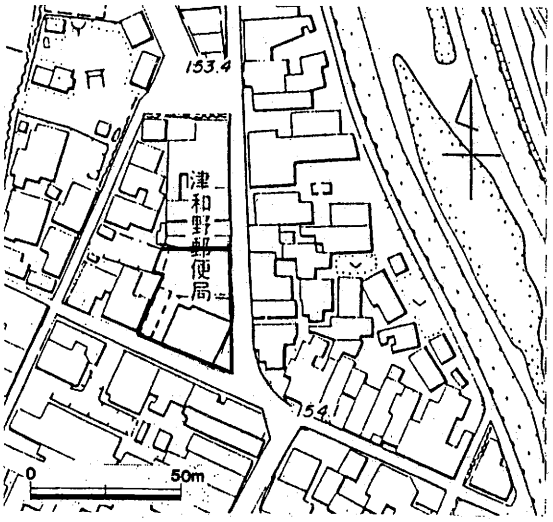


図2　発掘調査対象範囲（1/2,500）

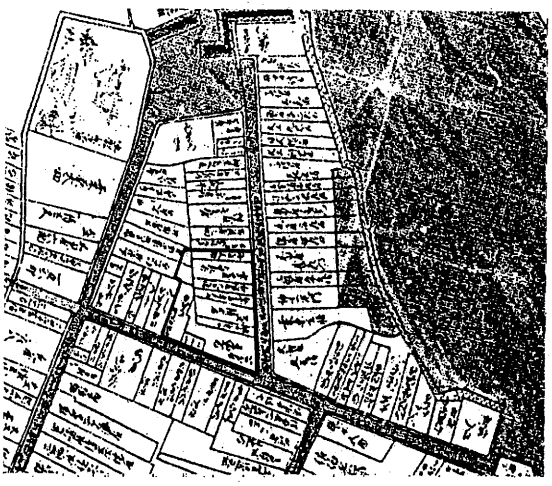


図３　元禄期の城下絵図（文献１に加筆）

る。近世城下が展開した東側では、発掘調査が少ないこともあって中世遺跡の確認は少ないが、寺社、石塔などが盆地西辺に点在している。

関ヶ原の役後、吉見氏は毛利氏に伴い萩に移るが、その後坂崎出羽守直盛の１６年間の治領となり、津和野城の大改築・城下町整備が行われた。坂崎氏断絶の後、元和３（1617）年に因幡鹿野城（鳥取県鹿野町）より亀井氏が入城し、１１代２２５年間の治世を経て明治維新を迎えることとなる。この間、津和野城下はたびたび大火に見舞われたということが、古記録・伝承などから知られている。祇園町遺跡は、城下町の北端付近の町屋が広がる部分に当たり、東側前面の南北に延びる道筋は山陰道及び　津和野奥筋往還であった。北西側には祇園社御旅所があり、南西側には山中鹿之助の菩提寺である幸盛寺があったとされている。

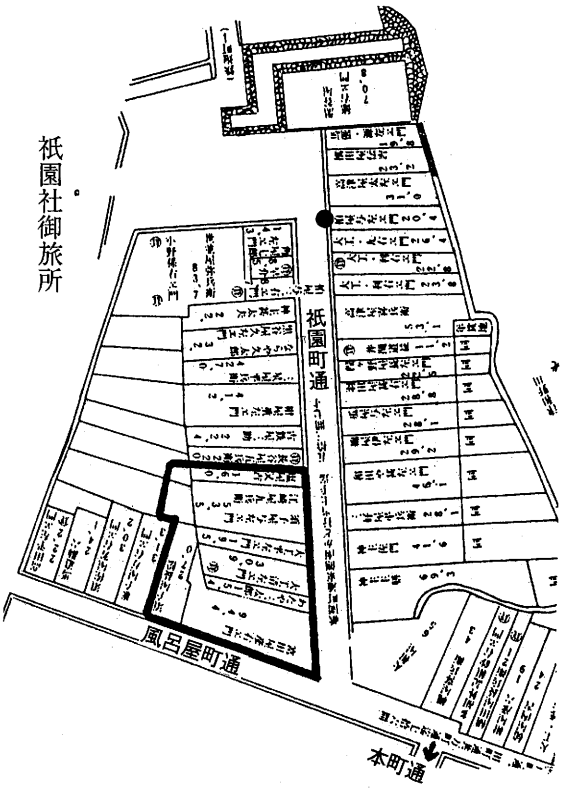


図４　元禄期の城下絵図略図（文献１に加筆）

Ⅲ．調査の概要

調査対象地は、鉄筋コンクリート製であった旧郵便局庁舎部分によって大きく攪乱を受けていることが予想されたため、攪乱が少なく、新たに掘削が行われる部分を中心に計５４㎡の発掘調査をおこなった。調査区名は、試掘調査１・２区の番号を継続して３～６区とした。試掘調査で確認していた焼土層にともなう遺構面を層位的に発掘する必要があることから、まず各区とも調査区縁辺にサブトレンチを設定して層序の把握に努めた。サブトレンチで把握した焼土のうち、下面に砂質土をともなう焼土が各区とも認められたことからこの焼土層を鍵層と仮定して第２焼土と仮称し、その上下にある焼土を各区ごとに第０～５焼土とした。よって、別区の同じ番号を持つ焼土層であっても、厳密な対応関係を検証したものではない。調査は、焼土層にともなう遺構面の検出を中心にしておこなった。

１．遺構の概要

【３区】

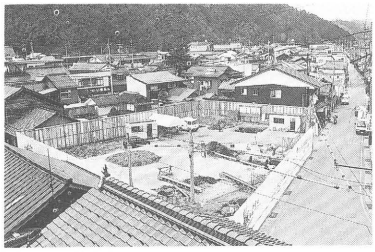
焼土は第１～４焼土までの４層を確認した。焼土は３区西半で不明瞭となり、試掘調査２区で焼土層が少なかったことと同じ状況であった。これは、建物が少なく裏庭的な空間に近いことを示すものと考えられる。近現代の攪乱が所々に及んでいたが、各焼土層に対応する遺構面が確認でき、建物基礎石列が良好な状況で遺存していた。

第１焼土下面

建物跡基礎石列（３－Ｓ７）の主軸はN９°Ｅを計る。調査区南辺の石列がこの建物跡に伴うとすれば、間口 3.3mの建物跡が復元できる。

第２焼土下面

建物跡基礎石列（３－Ｓ８）の主軸はN３°Ｅを計る。北辺の基礎石に比べ、西辺の基礎石は小さい。礎石状のものが少ないことから、部分的に抜き取りが行われ再利用されたことも考えられる。西辺の基礎石は途中で屈折し、基礎石に沿って黄褐色硬質土のタタキ面（３－Ｓ９）が存在していた。３－Ｓ８の東側には石列（３－Ｓ10）がある。いずれも 20～30 ㎝程度の小さな石であり、上面が平らな礎石状のものはない。その主軸はN81°Ｗ、直交方向の主軸Ｎ９°Ｅを計る。３-Ｓ８北辺の基礎石とはやや主軸が傾き、検出高もやや低いことから別時期の遺構である可能性も残る。



調査対象地遠景（南東より）

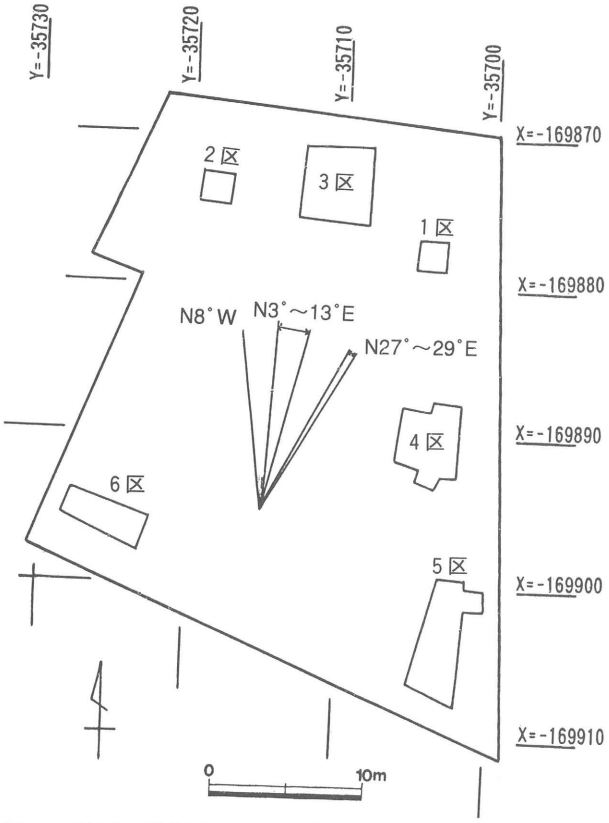


図５　試掘・発掘区の配置と遺構主軸の略図（1/500）

第３焼土下面

建物跡基礎石列（３－Ｓ11）の主軸はN11°Ｅを計る。調査区南端付近で基礎石抜き取り痕を確認した。建物跡基礎石列（３－Ｓ12）の主軸は、３－Ｓ11と同じくN11°Ｅを計る。３－Ｓ11との間は約0.7m、３－Ｓ13との間は約1.0mである。建物跡基礎石列（３－Ｓ13）の主軸はN79°W、直交方向の主軸N11°Ｅを計る。３－Ｓ11と３－Ｓ12の間で溝（３－Ｓ14）を検出した。幅約30～40㎝、深さ約10㎝である。３－Ｓ11と３－Ｓ12にほぼ平行しており、埋土が第３焼土であったことから、雨落ち溝が第３焼土にともなう火災によって埋まった跡である可能性がある。この溝は途中で屈曲しており、３－Ｓ１１が張り出し部を伴っていた可能性を示すものと考えられる。

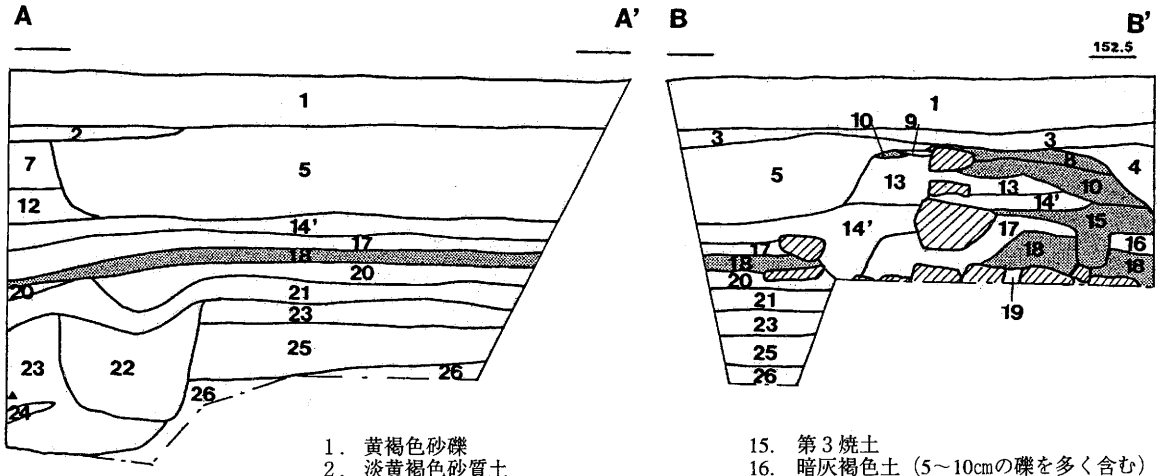
第４焼土下面

建物跡基礎石列（３－Ｓ15）の主軸はＮ９°Ｅを計り、東西1.7m、南北2.7mが復元できる。北西隅で基礎石が良好に残っているほかは、全体に残りが悪い。３－Ｓ16との間は約0.95m、３－Ｓ１７との間は約0.3mである。建物跡基礎石列（３－Ｓ16）の主軸は３－Ｓ１５と同じく、Ｎ９°Ｅを計る。南北約1.3mを確認した。建物跡基礎石列（３－Ｓ17）の主軸はＮ８１°W、直交方向の主軸Ｎ９°Ｅを計り、３－Ｓ１５・１６と同じ主軸である。東西約2.1mを確認した。

掘立柱建物跡（３－Ｓ１８）は、３－Ｓ１５の下で検出したことから、同じ第４焼土下面での検出とした３－Ｓ１５～１７より１時期古い建物跡と考えられる。３－Ｓ１～Ｓ４の柱穴で構成され、東西2.1m、南北1.8mである。

２１層下面

調査区北辺トレンチでの確認に留まったため、詳細は不明な点が多い。溝（３－Ｓ６）は幅75㎝、深さ65㎝の規模である。打ち込まれた杭２本を検出している。トレンチ北壁及び南壁で同様の落ち込みが見られたことから、溝の一部であると推定した。検出範囲が限られていることから断定は難しいものの、その主軸は座標軸方向やや西寄りである可能性がある。同じ調査区北辺トレンチで確認した大型土坑（３



1．黄褐色砂礫
2．淡黄褐色砂質土
3．暗褐色土（焼土が混じる）
4．撹乱土（ビニール紐あり）
5．撹乱土（ガラス片あり）
7．暗褐色土（焼土を少量含む）
8．第１焼土（下面炭、上半焼土多い）
9．黄褐色粘土
10．第２焼土
12．暗褐色土（焼土・炭をほとんど含まず）
13．褐色土
14．暗黄灰色砂
15．第３焼土
16．暗灰褐色土（5～10cmの礫を多く含む）
17．暗灰褐色土
18．第４焼土
19．暗灰色粘質土
20．灰褐色砂礫
21．淡灰色粘土（5cm以下の礫を多く含む）
22．暗灰色粘質土（しまり弱、3-S6埋土）
23．暗灰色粘土（3-S5埋土）
24．暗灰色砂　（　〃　）
25．灰褐色砂礫
26．淡灰褐色砂礫

図６　３区土層断面図（1/40）

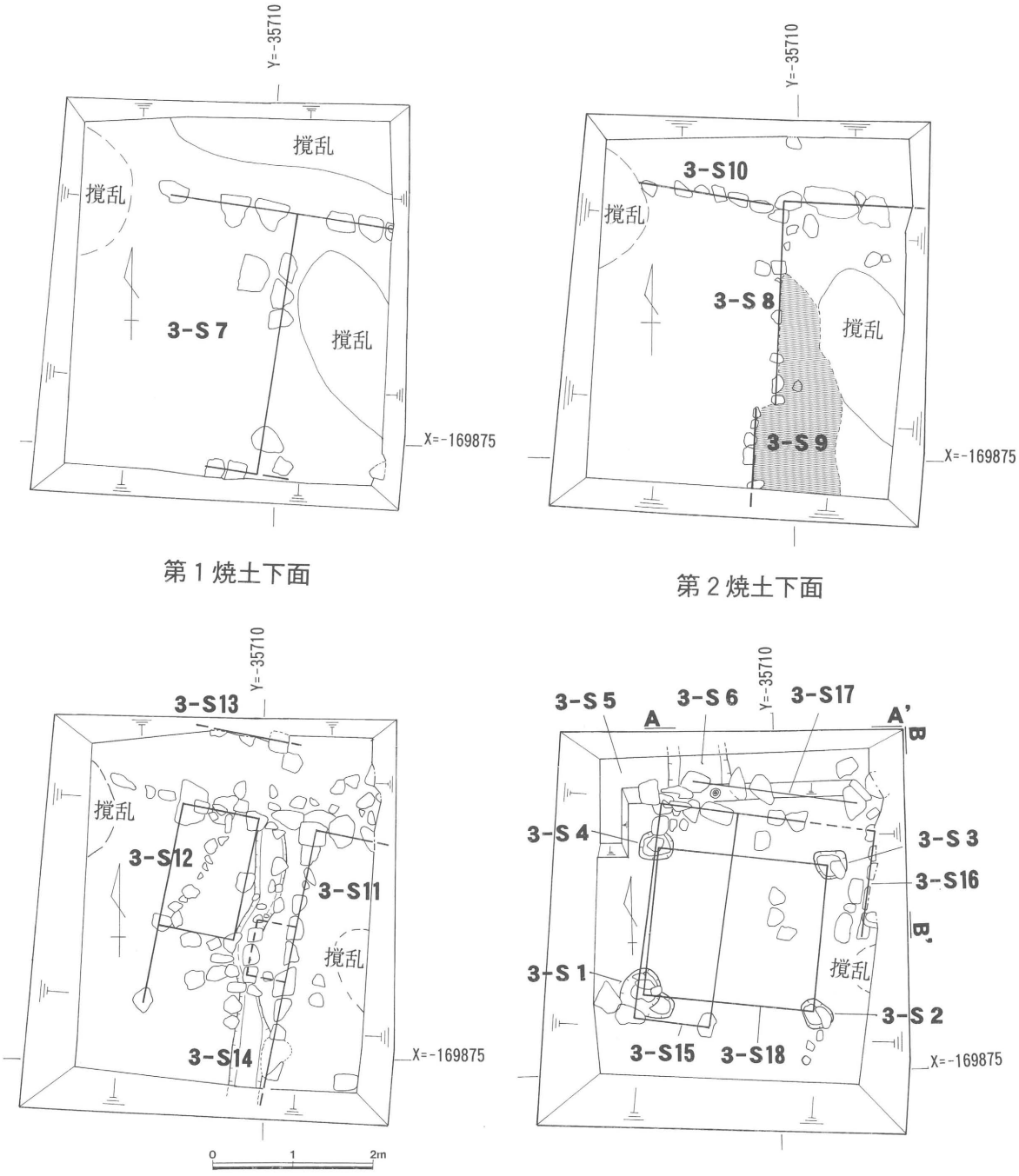
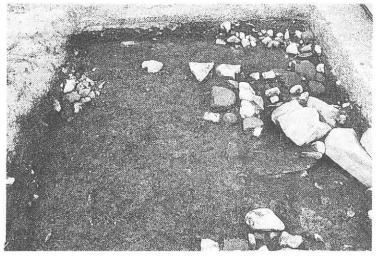
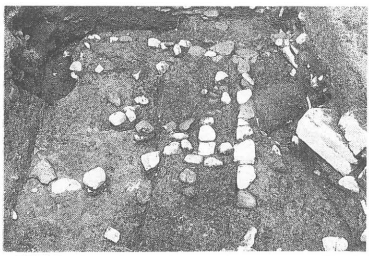


図7　3区遺構平面図（1/80）



第1焼土下面（南より）

第2焼土下面（南より）



第3焼土下面（南より）

－Ｓ５）の埋土は暗灰色粘土、暗灰色砂が互層状に堆積しており、湿地状の地形であった可能性がある。試掘調査２区２０～２２層においても類似した粘質土の堆積状況を確認しており、これが同一遺構であるとすると東西９m以上、南北４m以上、深さ０．８m以上の大型遺構となる。１５Ｃ代の青磁が出土している。

【４区】

３層下面、第１～４焼土下面、１８層下面、２０層下面が遺構面に相当している。１８層は焼土を伴っていないが、５区第５焼土に対応しているものと考えられる。

３層下面

建物跡基礎石列（４－Ｓ７）の主軸はＮ１１°Ｅを計る。基礎石の残りは悪い。４－Ｓ７の北約１．２mのところで確認した建物跡基礎石列（４－Ｓ８）の主軸はＮ７９°Ｗ、直交方向の主軸Ｎ１１°Ｅであり、４－Ｓ７と同じ主軸である。基礎石の幅は約６０cmと、密に並べられている。このことから、４－Ｓ７とは建物跡の機能が異なっていた可能性があり、蔵の基礎石などが想定される。

第１焼土下面

第１焼土にともなう廃棄土坑（４－Ｓ１）を検出した。土坑の埋土はほとんどなく、火災後に廃棄された大量の陶磁器類（図１４～２０）のほか、新寛永通寶、銅製品破片、鉄釘が埋まっていた。

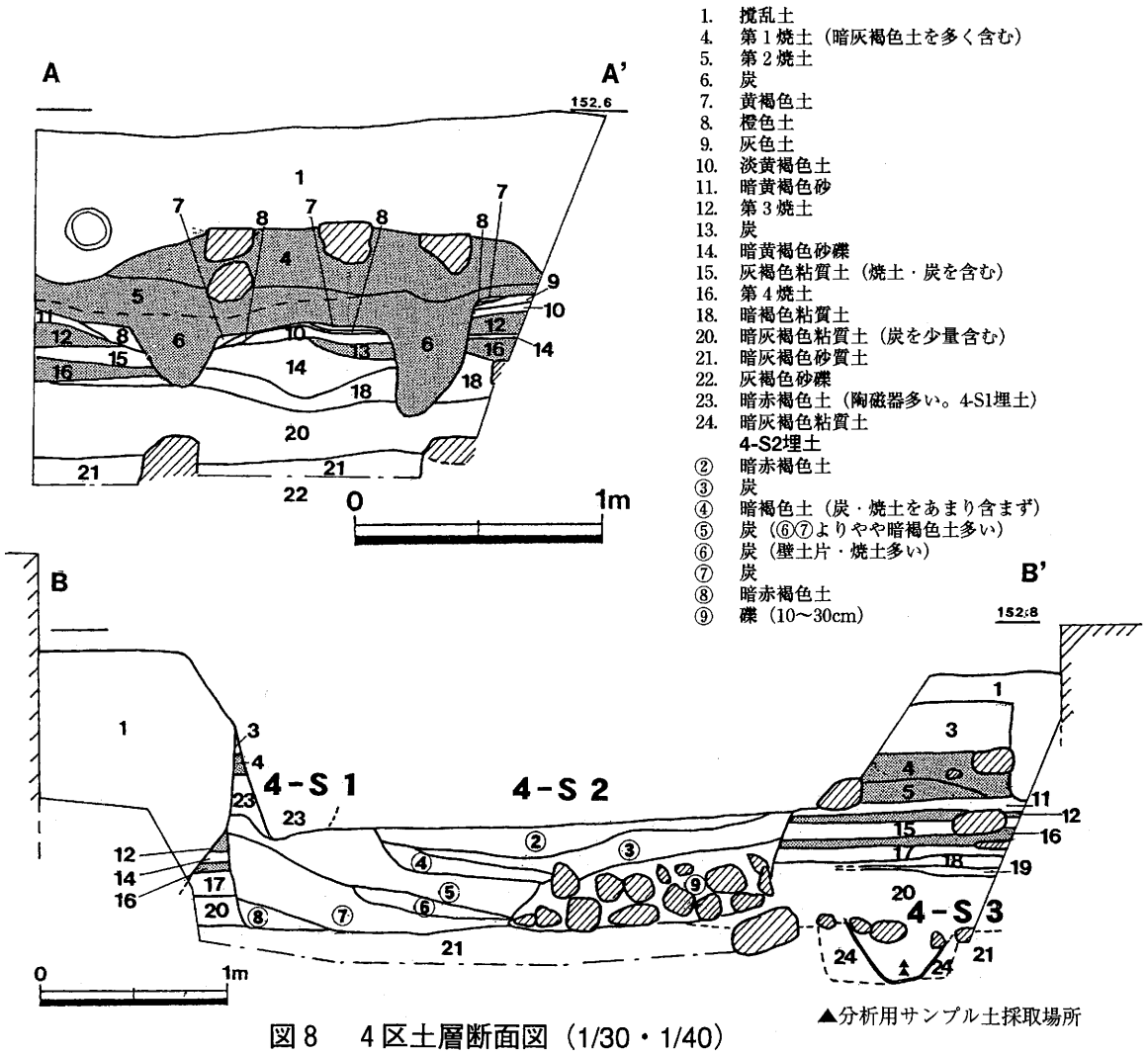
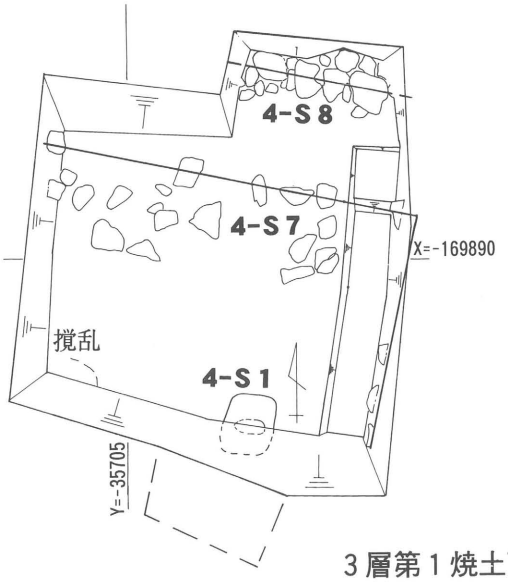
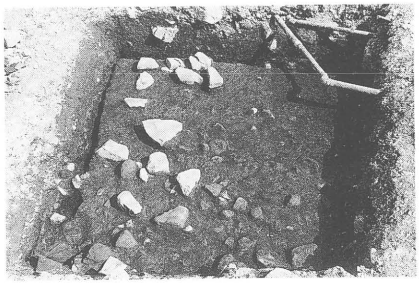


図８　４区土層断面図（1/30・1/40）

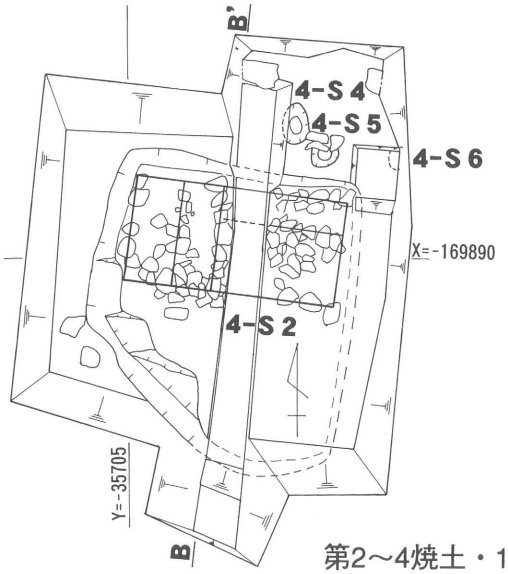


3層第1焼土下面

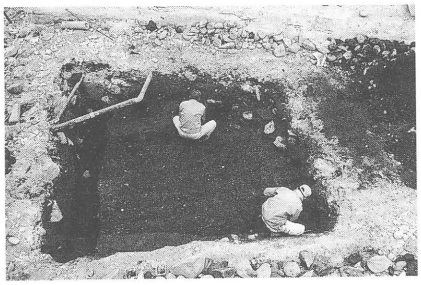


3層下面（西より）

4-S1土層断面（北より）

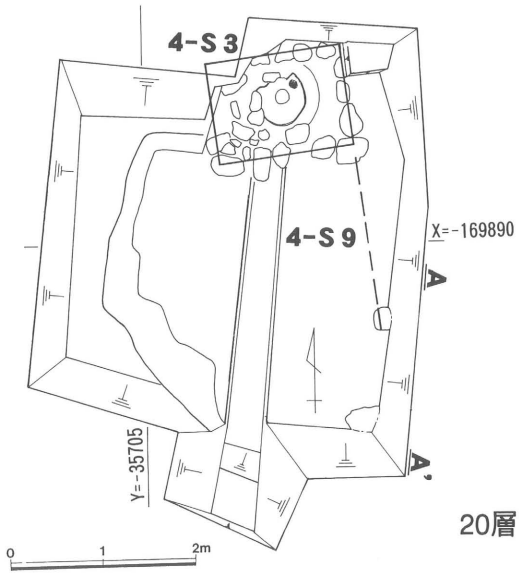


第2～4焼土・18層下面

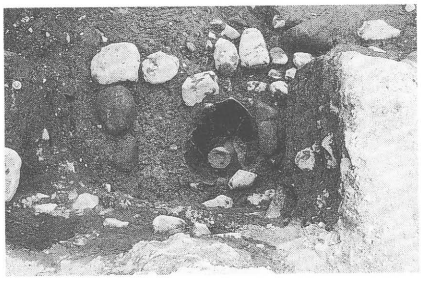


4-S2検出状況（北より）

4-S2発掘状況（東より）



20層下面



4-S3検出状況（北より）

図9　4区遺構平面図（1/80）

第２焼土下面

穴蔵（４－Ｓ２）を検出した。南北約３．３ｍ、東西約２．９ｍ、深さ約０．６ｍである。南西隅が不整形な形で、壁の傾斜も緩やかであることから、この部分に階段状の通路が存在していた可能性がある。穴蔵北半の底には石が並べられており、この範囲が主に倉庫として使用されていたものと考えられる。土層断面から、第２焼土の火災の後には主に南側及び西側から穴蔵は埋められたと考えられる。遺構内からは、大量の陶磁器類・炭・壁土・炭化穀物が出土している（図２１～２８）。分析の結果、穀物の大半はコメであり、一部はヒエであった。穀物には炭化材が付着しているものもあり、櫃などの木製容器に入れて保管されていたものと考えられる。これらのことから、４－Ｓ２は穀物を保管していた半地下式の穴蔵であり、大量の壁土の出土から考えると上部は土蔵造りであったと考えられる。なお、４－Ｓ２埋土を覆う第１～２焼土の間層には、４－Ｓ２北西半を中心にして約２０㎝程度の石の集石が存在していた。

第２焼土下面では他にも礎石状の石を検出しているが、建物跡の復元には至っていない。

第３～４焼土・１８層下面

礎石状の石、柱穴を検出しているが、建物跡の復元には至っていない。

２０層下面

建物跡基礎石列をともなった埋甕遺構（４－Ｓ３）を検出した。埋甕は瓦質製で、直径約０．８ｍの穴に埋められており、底から約３５㎝の当時から地面に埋められていた部分のみが残っていた。底部内面は南側が北側より約１．７㎝低く、南側が汲み取り口であった可能性がある。甕の内面北東部に尿の痕跡らしき淡褐色の付着物が認められた。自然科学分析の結果、大便の証拠が乏しいことから、小便専用の便壺であった可能性が指摘されている。４－Ｓ３からは１６Ｃ後半の遺物が主に出土している（図２９）。埋甕の周囲の基礎石列は約２０～４０㎝の川原石を並べてあるもので、南北１．１ｍ、東西１．４５ｍの規模である。基礎石列東辺の延長線上、約１．９ｍのところには建物跡基礎石（４－Ｓ９）がある。これらの建物跡の主軸はＮ８°Ｗを計る。

なお、下層の２１層からは、１６Ｃ前半の青花磁器・土師器皿の小片が出土している。

５区土層断面（西より）

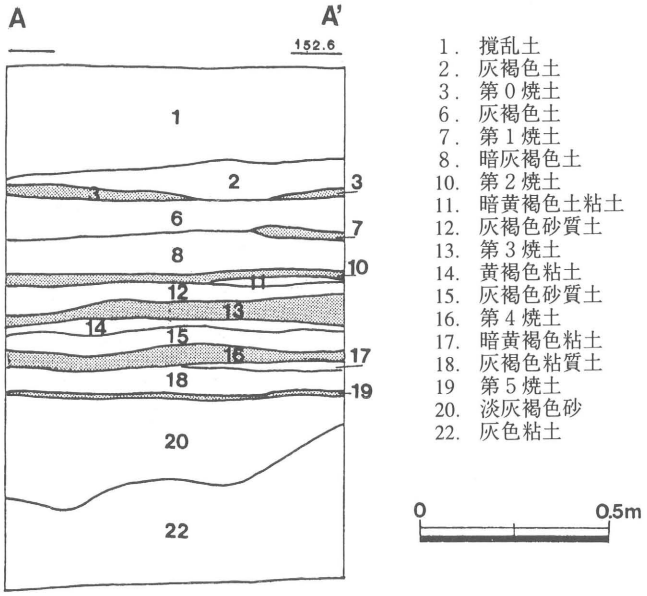
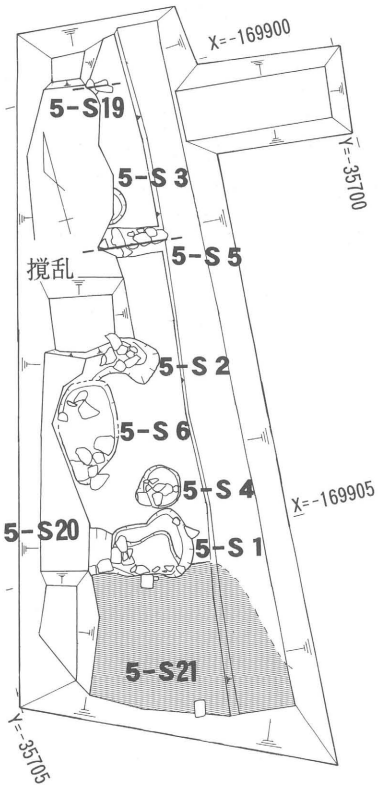
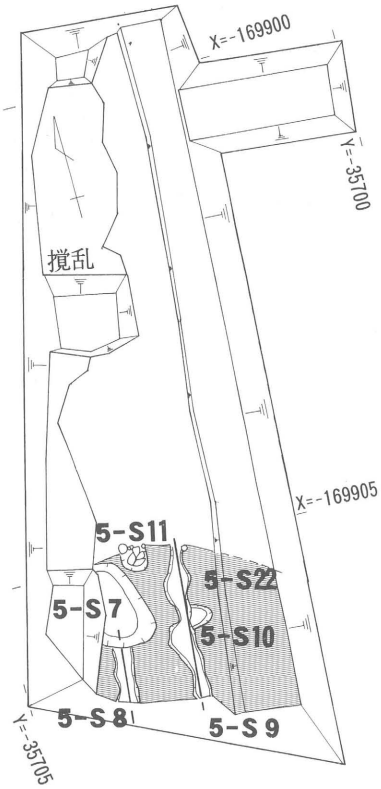


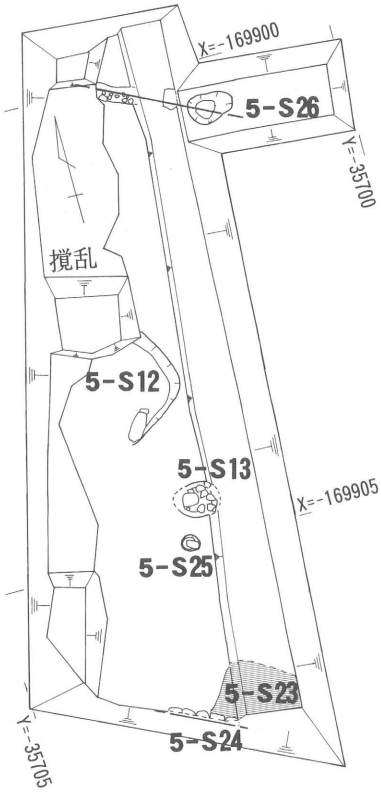
図10　５区土層断面図（1/20）



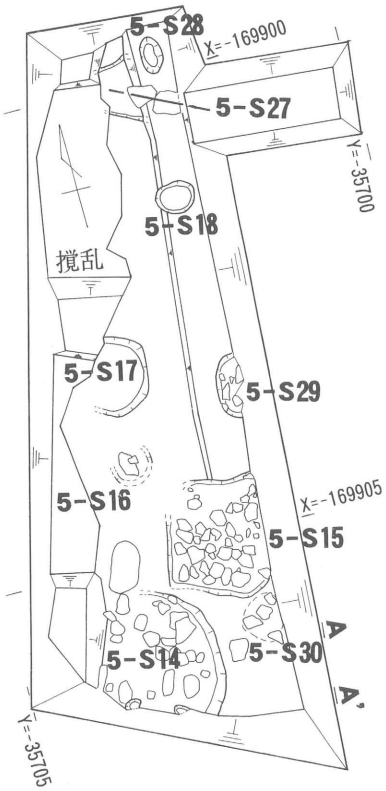
第２焼土下面



第３焼土下面



第４焼土下面

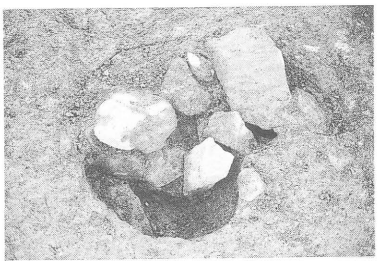


第５焼土下面

0 1 2m

図11　５区遺構平面図（1/80）

5-S1･21検出状況（東より）



5-S4半掘状況（北東より）

5区第3焼土下面(南より)

5-S24検出状況(北より)

5-S14･15発掘状況（北東より）

【5区】

第0～5焼土を確認した。特に、第3焼土は明瞭な明赤褐色土で、激しい火災を想像させるものであった。遺構が確認できたのは第2～5焼土下面である。調査区の西側は旧郵便局庁舎によって大きく攪乱を受けていた。調査区東西方向の長さが短く、遺構主軸の推定は難しいが、同一遺構面はほぼ同じ主軸であることが多いことを考慮して推定した。調査期間中、旧街道筋である祇園町通りとの関わりを確認する目的で5区北端付近に東方向のサブトレンチを追加したが、調査区内では顕著な遺構は確認できなかった。

第2焼土下面

焼土土坑（5－S1）は、東西90㎝、南北75㎝、深さ15㎝である。焼土・炭が多く含まれ、焼石・約450gの金属塊1個が出土したことから、鍛冶施設であった可能性がある。4－S1の南側には黄褐色粘土のタタキ面（5－S21）がある。土坑（5－S2・S4・S6・S20）は遺構内に石を伴う。5－S4からは鉢・甕の一括資料が出土した（図30）。不明遺構（5－S3）は径40㎝、深さ13㎝の浅い穴に黄褐色粘質土が埋められ、その上面に円形の炭層が残る。溝（5－S5）は幅30㎝、深さ35㎝、中に石が詰まっている。調査区北端では、建物跡基礎石列の一部（5－S19）を確認した。5－S5・S19・S21の主軸はN84°W、直交方向の主軸N6°Eを計る。

第3焼土下面

調査区南端に黄褐色粘土のタタキ面（5－S22）がある。このタタキ面を切って、溝（5－S8・S9）が掘られている。5－S8は幅約20㎝、深さ約6㎝、5－S9は幅約15～30㎝、深さ約3㎝である。5－S8・S9は0．75mの間隔を置いて平行しており、その主軸はN6°Eを計る。他に土坑（5－S7)、浅いピット（5－S10)、焼石の入ったピット（5－S11）がある。

第4焼土下面

調査区南端に黄褐色粘土のタタキ面（5－S23）がある。その南西側には建物跡基礎石列（5－S24）を確認した。調査区北端では、建物跡基礎石列とその痕跡（5－S26）を確認した。中央に残る基礎石の東側では抜き取り痕、西側では基礎石の下に残された小石群を確認した。その他の遺構に土坑（5－S12)、ピット（5－S13・S25）がある。5－S23・S24・S26の主軸はほぼ同じであり、N63°W、直交方向の主軸N27°Eを計る。

第5焼土下面

調査区北端で、建物跡基礎石列とその痕跡（5－S27）を確認した。調査区南半では、集石を伴った土坑（5－S14・S15・S29)、焼土硬化面（5－S30）があった。5－S30の下約3㎝のところからは上面が平らな石4個が検出された。その他に土坑（5－S17)、ピット（5－S16・S18・S28）がある。遺構主軸の特定は難しいが、5－S15・S27をほぼ同主軸であるとすればN63°W、直交方向の主軸N27°Eを計る。

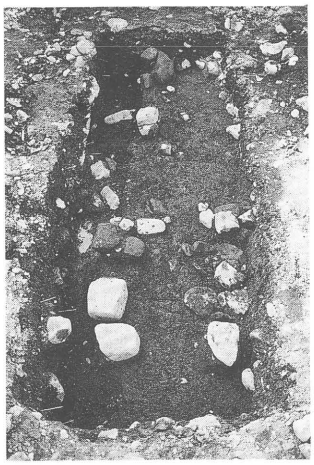
なお、第5焼土より下層である20層中からは主に16～17C代の遺物小片、22層中からは15～16C代を中心とする遺物小片が出土している。

【6区】

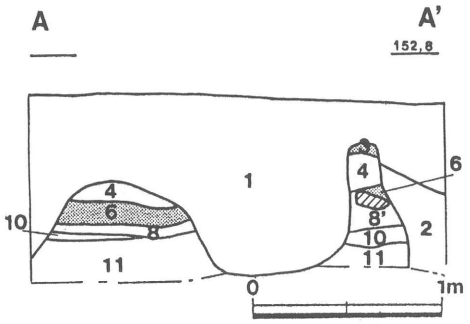
攪乱が非常に著しい調査区であったが、2枚の焼土層および3遺構面を確認した。

第2焼土下面

建物跡基礎石列（6－S6）を確認した。その主軸はN13°Eを計る。



6区第２焼土下面（東より）



1．撹乱土
2．撹乱土（石多い）
3．第２焼土
4．暗褐色土（焼土少量含む）
6．第３焼土
8．灰褐色砂質土（焼土少量含む）
8'．８に暗黄褐色土が少量混じる
10．暗灰褐色砂質土
11．灰褐色砂礫

図12　６区土層断面図（1/40）

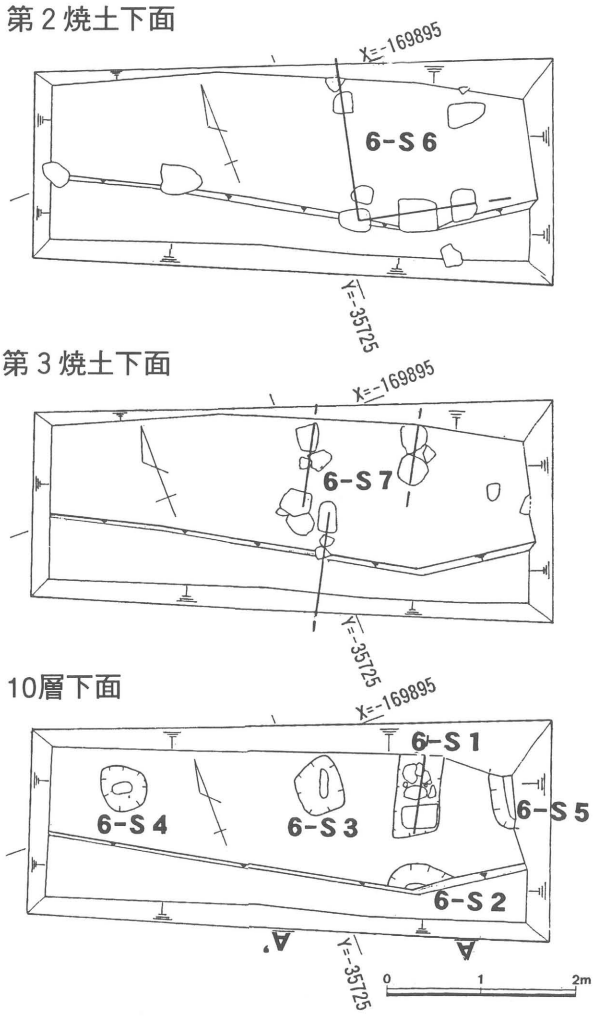


図13　６区遺構平面図（1/80）

第３焼土下面

建物跡基礎石列（６－Ｓ７）を確認した。その主軸はＮ２９°Ｅを計る。

１０層下面

土坑（６－Ｓ１）は長さ９０cm以上、幅４５cm、深さ４５cmである。中央部には石が埋まっており、底からは炭が多く出土している。土坑縁辺からは釘が出土しており、木箱が埋設されていたものと考えられる。主軸はＮ２９°Ｅを計る。そのほか、ピット（６－Ｓ２・Ｓ３・Ｓ４・Ｓ５）を検出した。

２．遺物の概要

今回の調査では、コンテナ約３０箱の遺物が出土した。紙幅の関係から、一括性のある遺構内遺物を中心に図面を掲載し、その内容は遺物観察表をもって説明に代えたい[(1)]。なお、今回の出土遺物の大部分が文様のある陶磁器であり比較的個体識別が可能であったため、最小個体数の算出には個体識別法を用いた。４－Ｓ１・Ｓ２については、遺構を一部掘り込んだ状態で遺構検出したこと、および遺構検出前にサブトレンチを発掘していたことから、遺構内としての取り上げ番号が１点でもあれば遺構内遺物とみなし、遺構検出前の出土品もその遺構内に含めた。出土遺物のうち灯明皿台、土師器皿については形態差が著しく、代表的なもののみを掲載し個体数を表に示した。また、参考までに１個体あたりの破片数を破片率として掲載し、小数点以下は四捨五入とした。

註(1)　出土陶磁器の大部分については、広島県立美術館　村上勇氏に御教示を賜った。

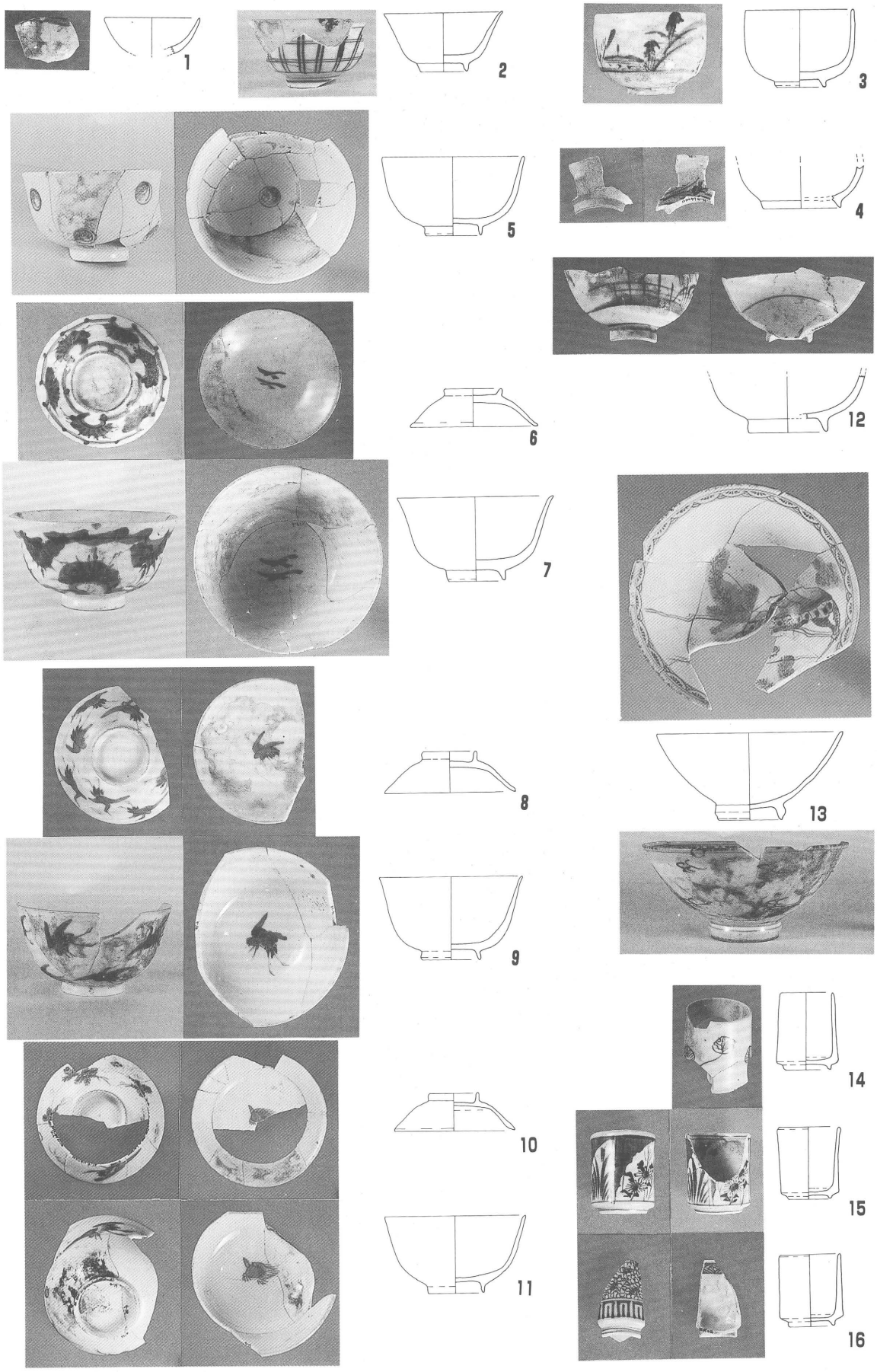


図14　4-S1　出土遺物（1/4）

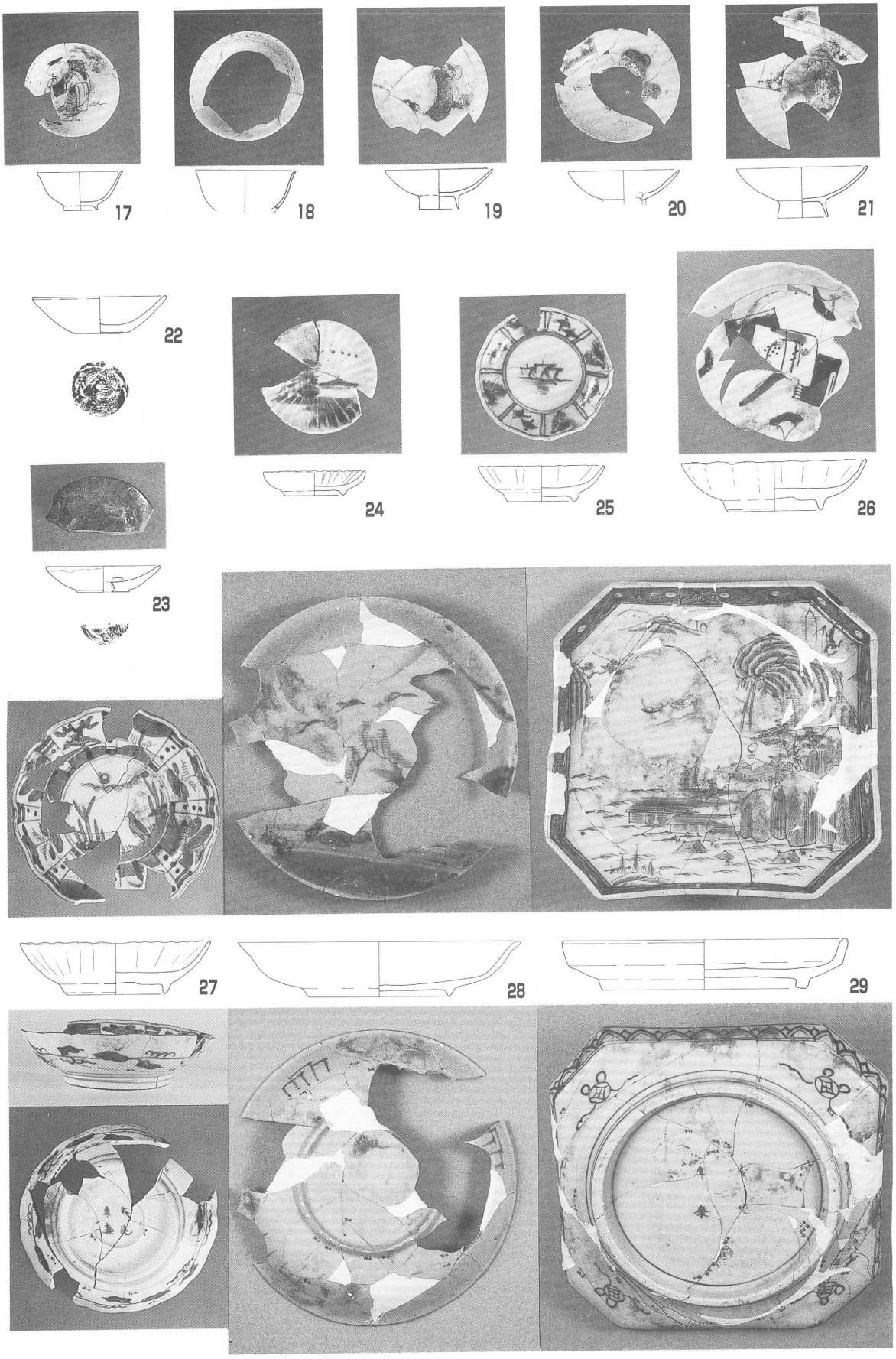


図15　4-S1　出土遺物（1/4）

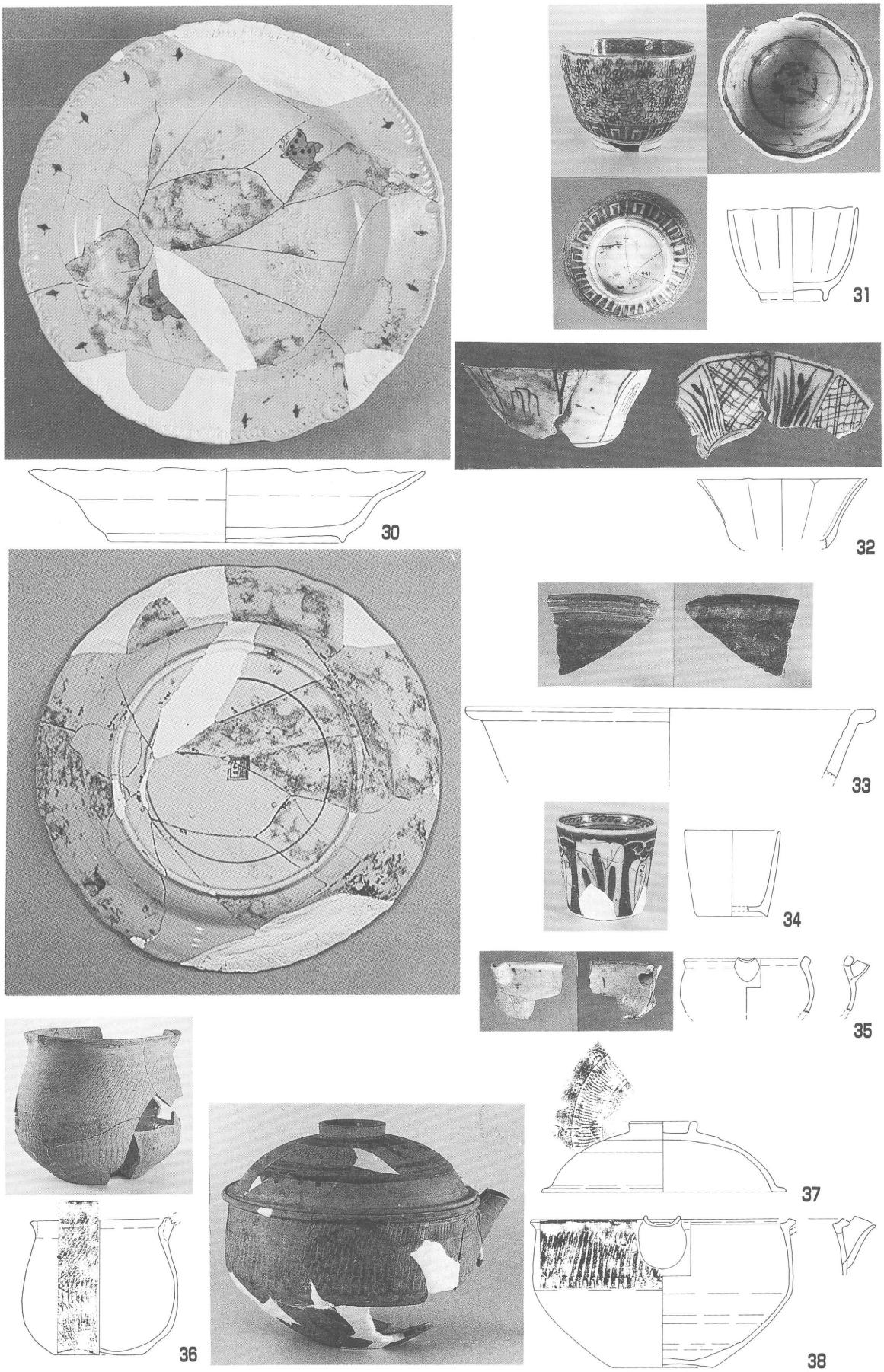
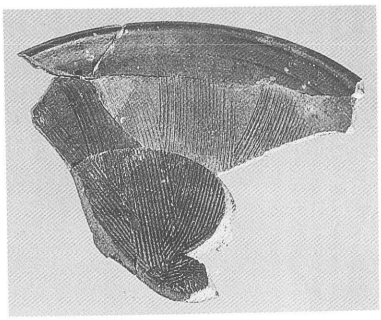
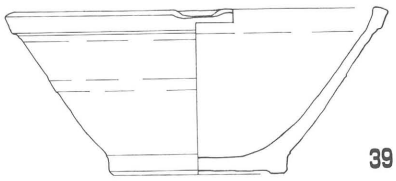
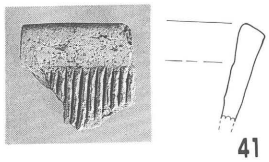


図16　4-S1　出土遺物（1/4）

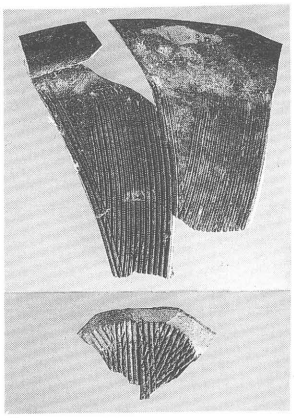


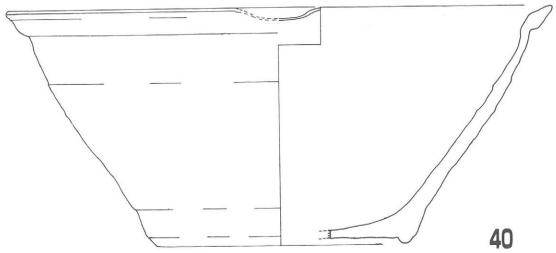


39

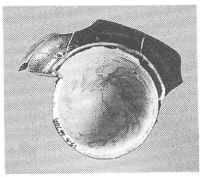


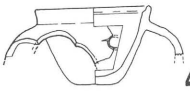
41



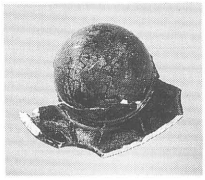


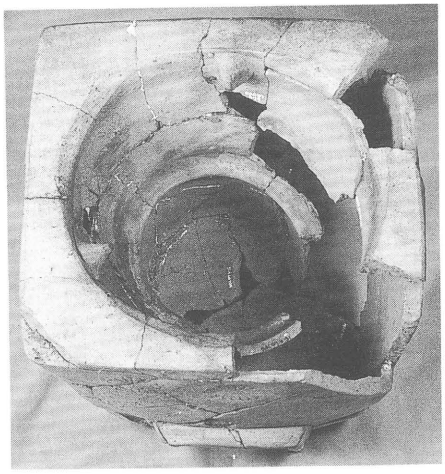
40

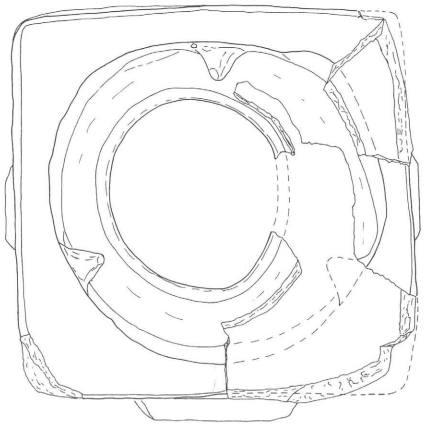


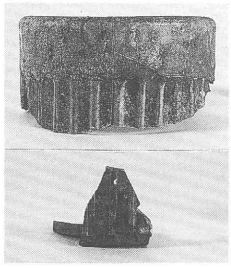


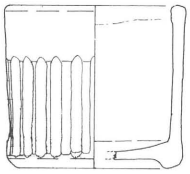
42



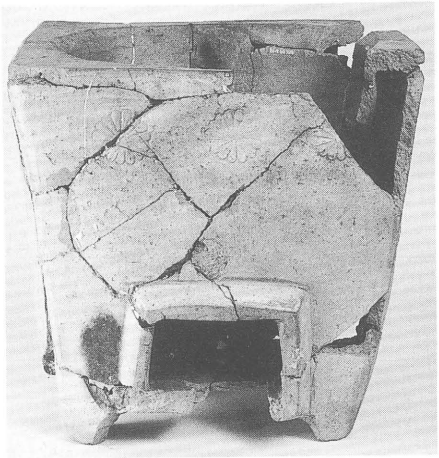


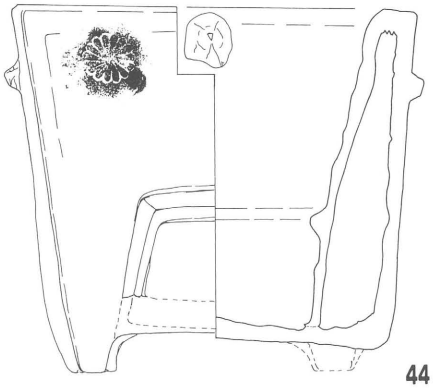






43





44

図17　4-S1　出土遺物（1/4）

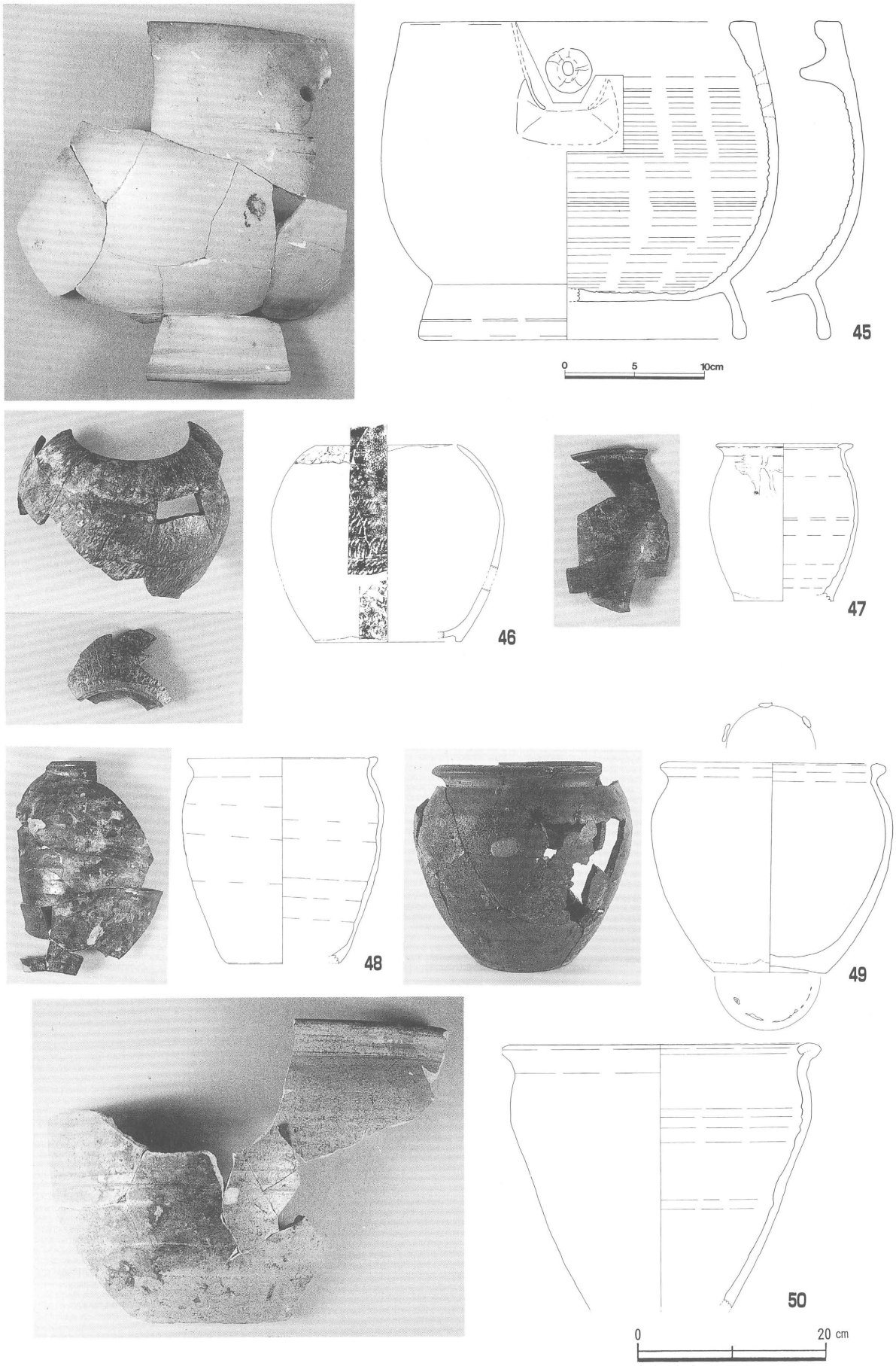


図18　4-S1出土遺物（45：1/4、46～50：1/6）

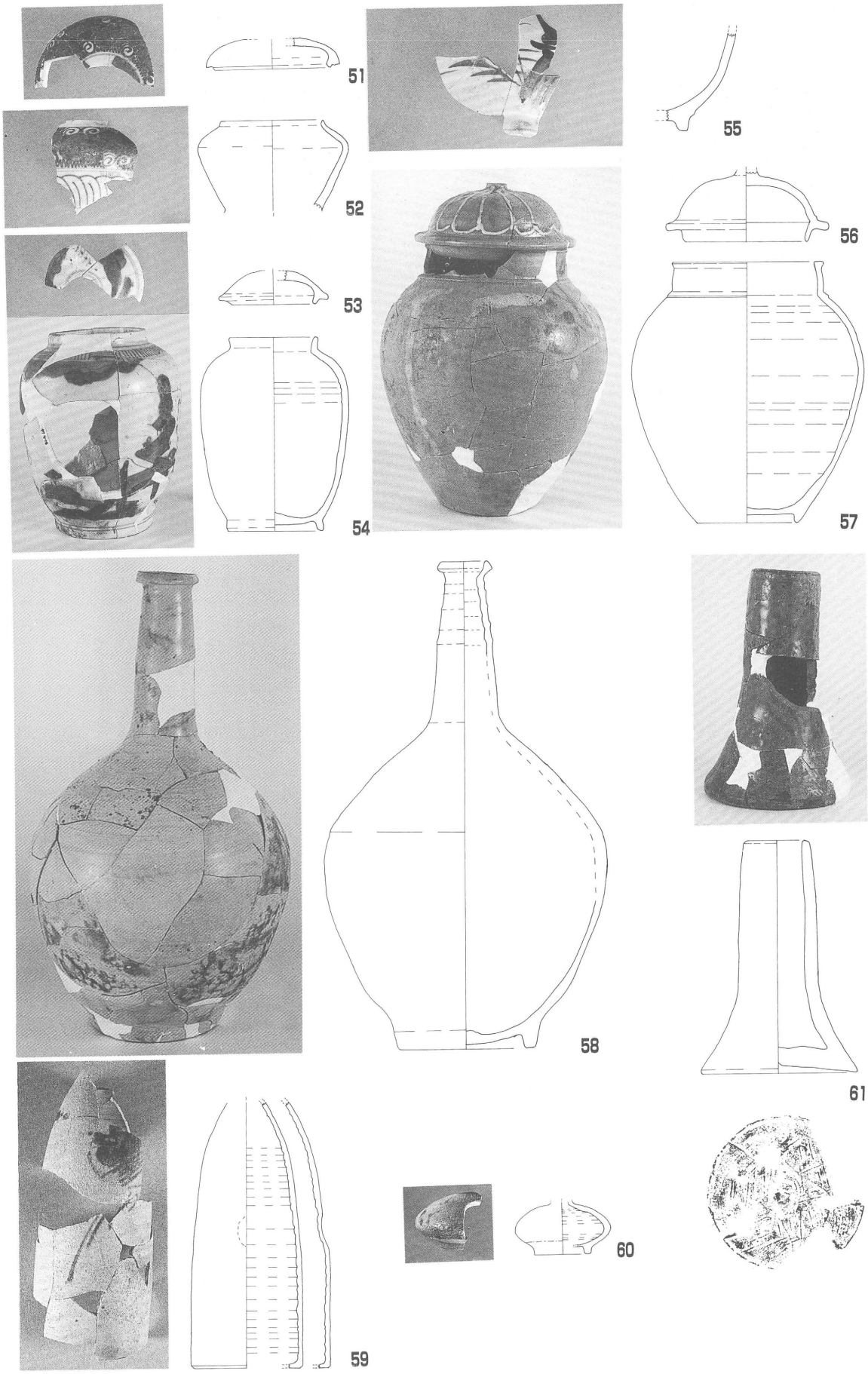


図19　4-S1　出土遺物（1/4）

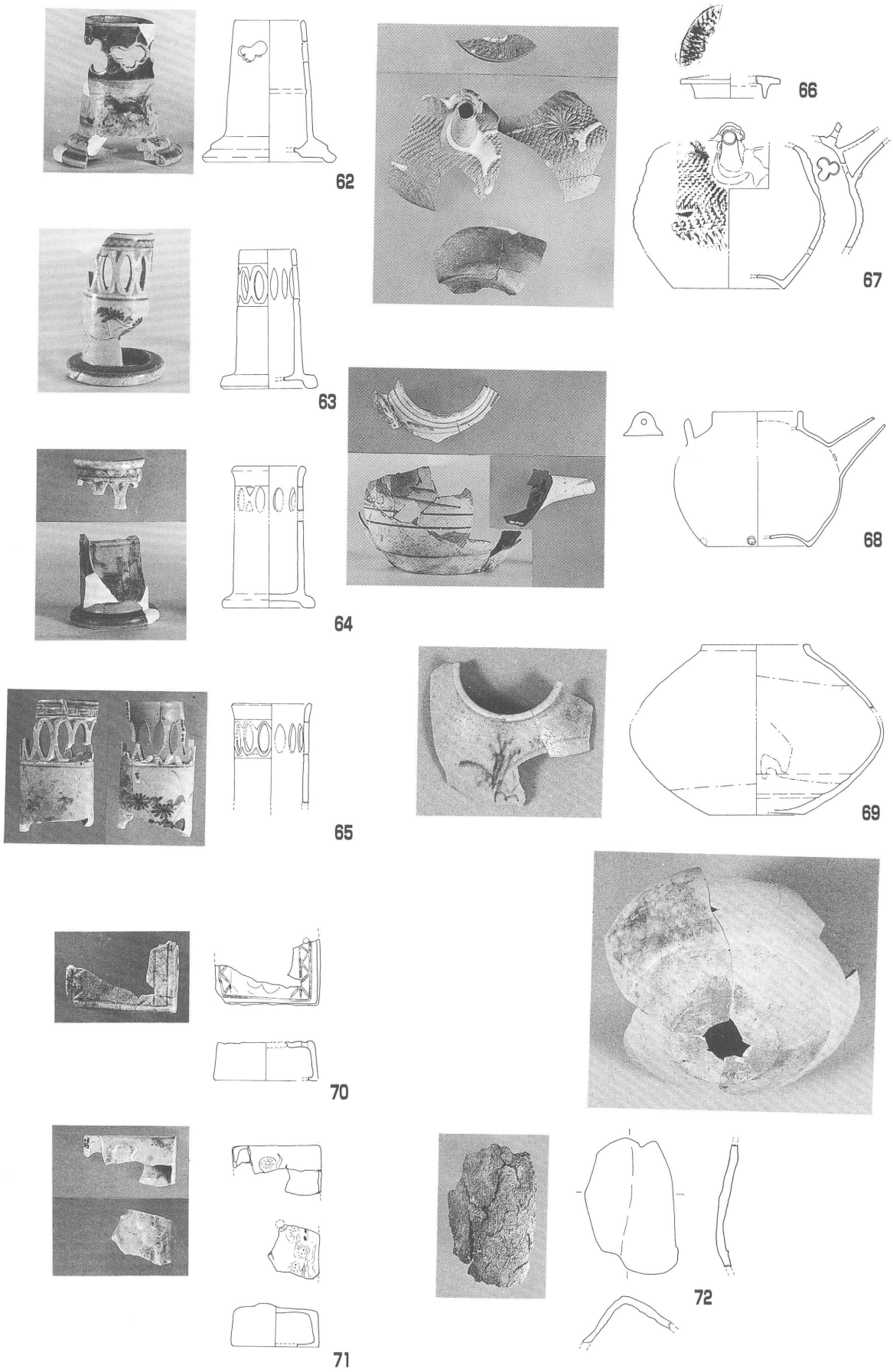


図20　4-S1　出土遺物（1/4）

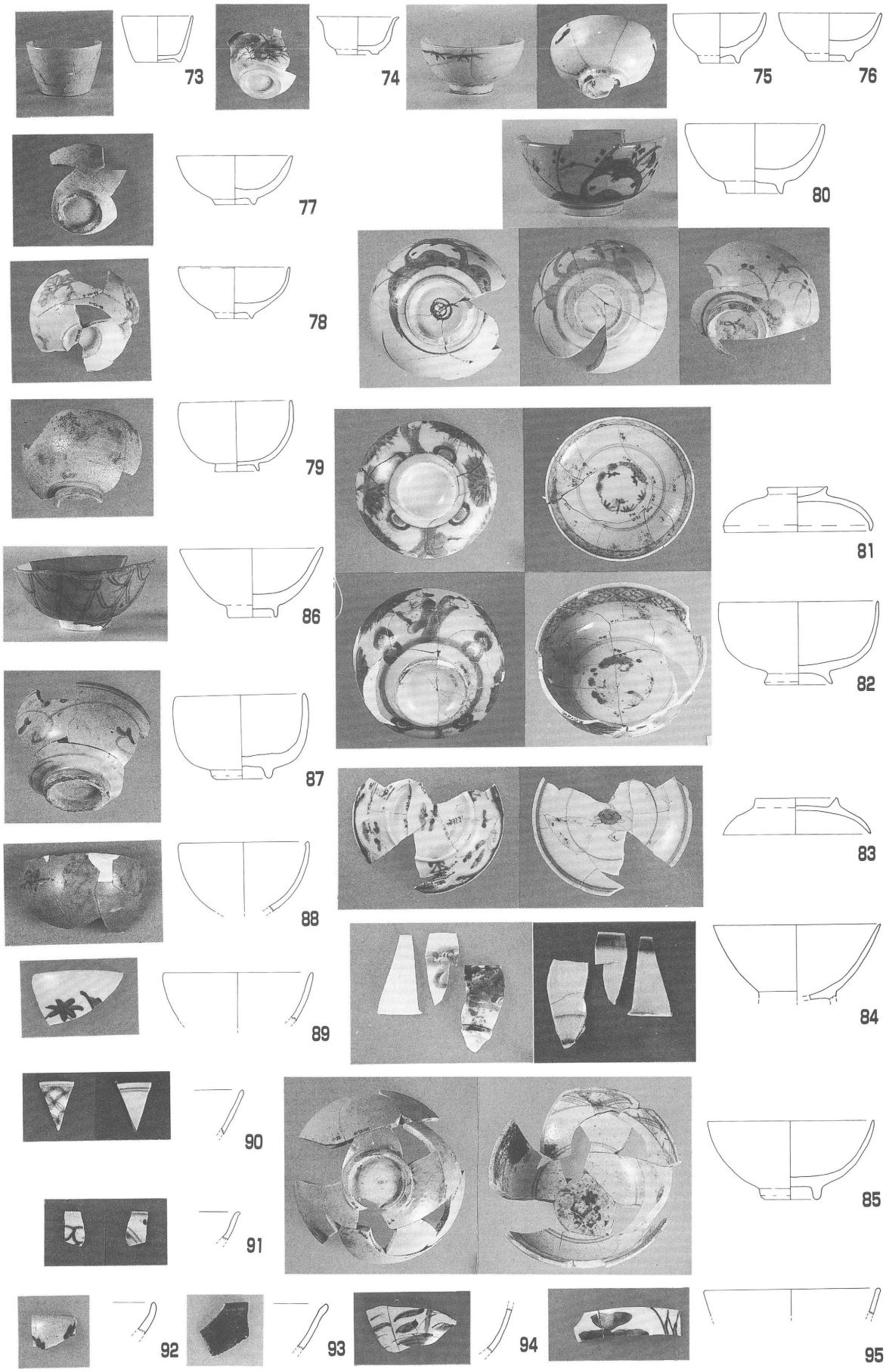


図21　4-S2　出土遺物（1/4）

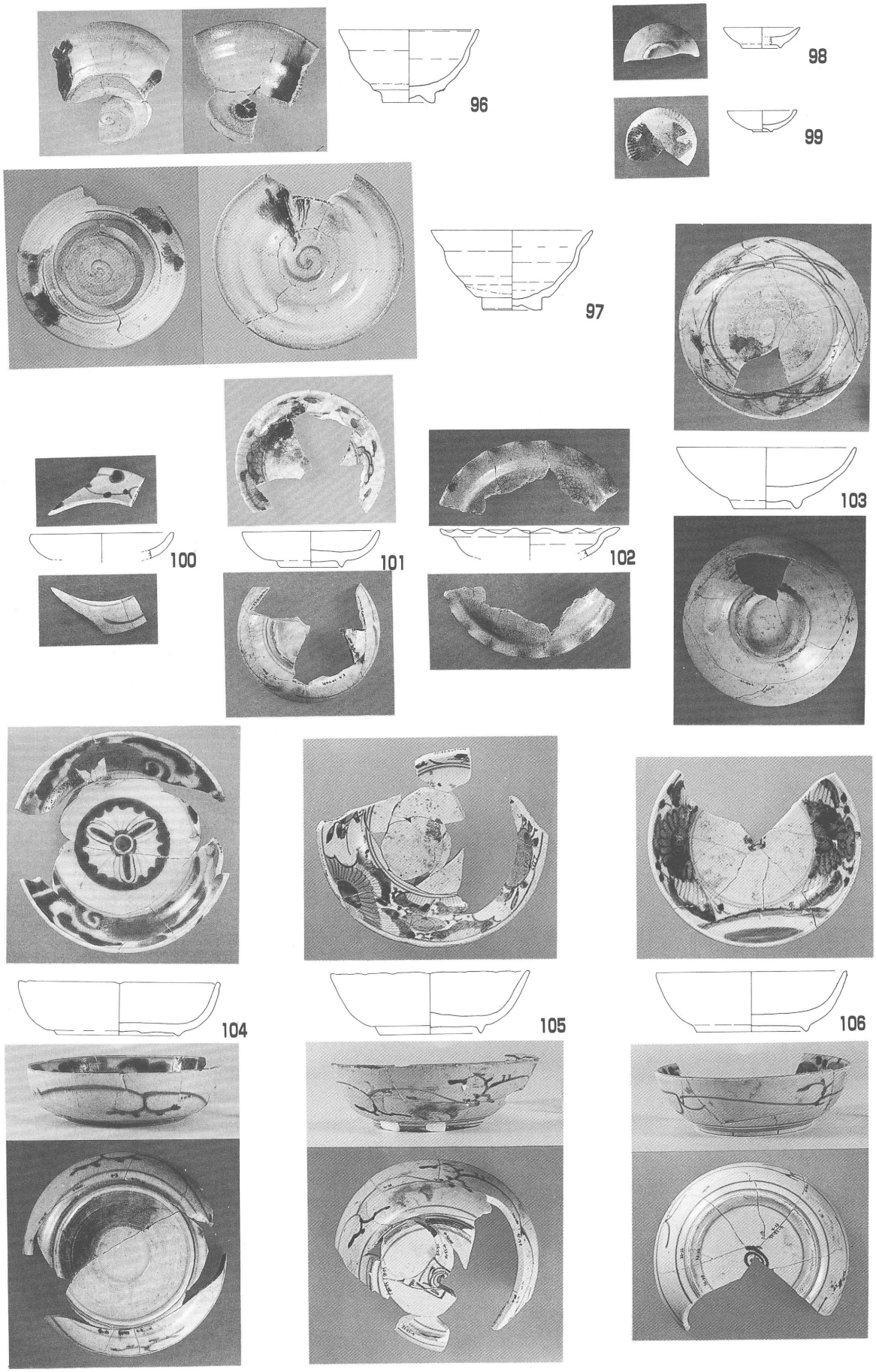


図22　4-S2　出土遺物（1/4）

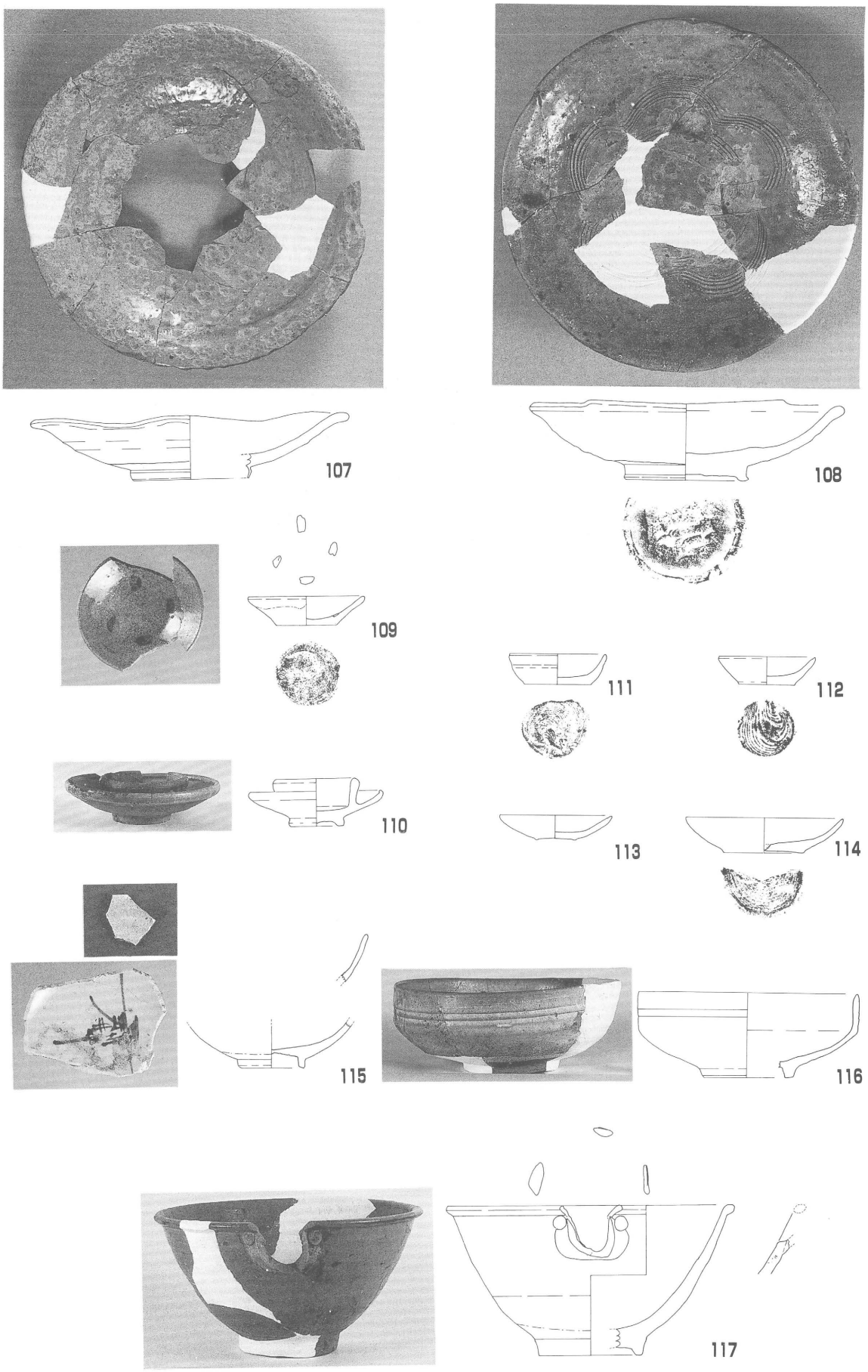


図23　4-S2　出土遺物（1/4）

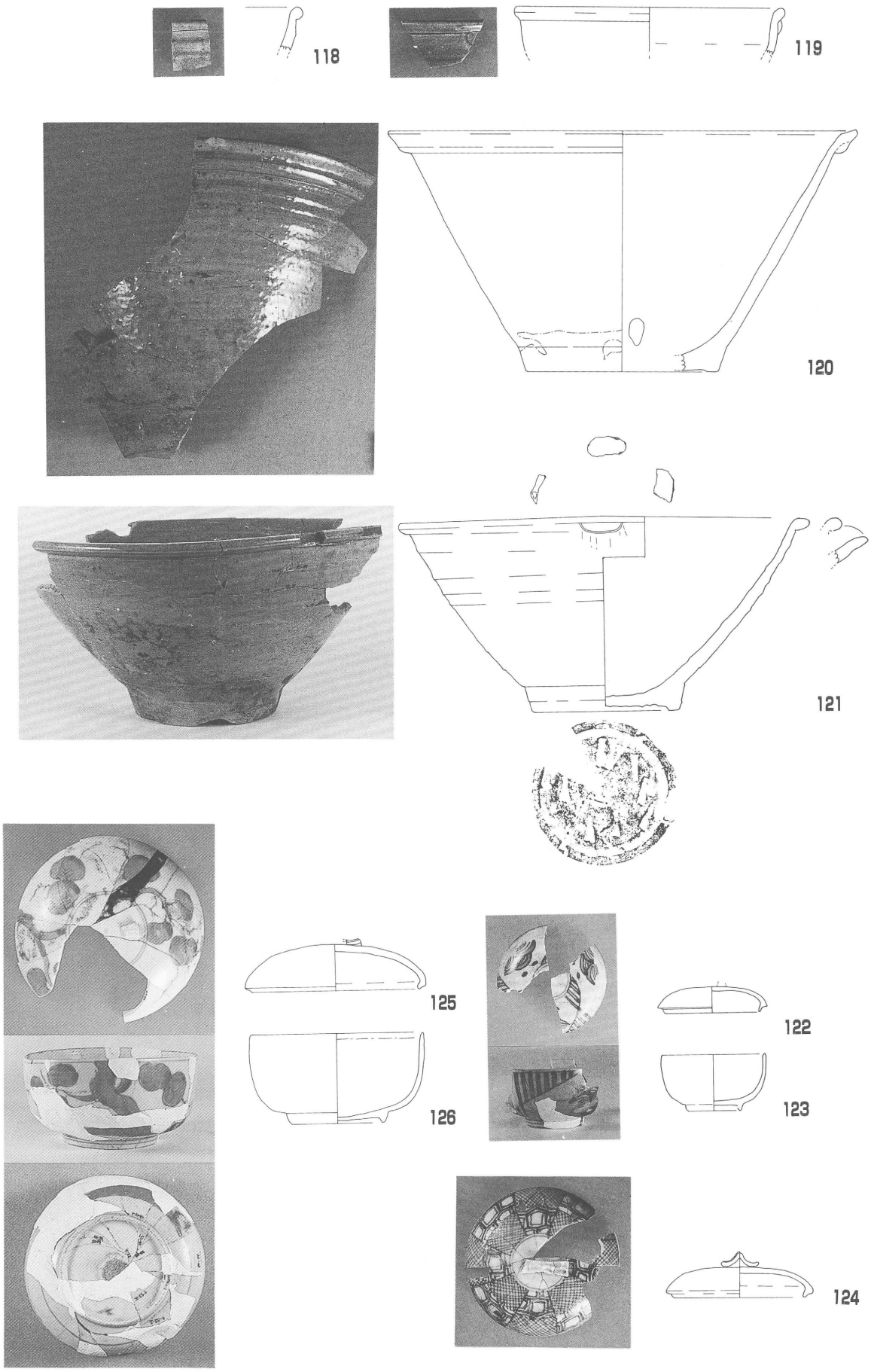


図24　4-S2　出土遺物（1/4）

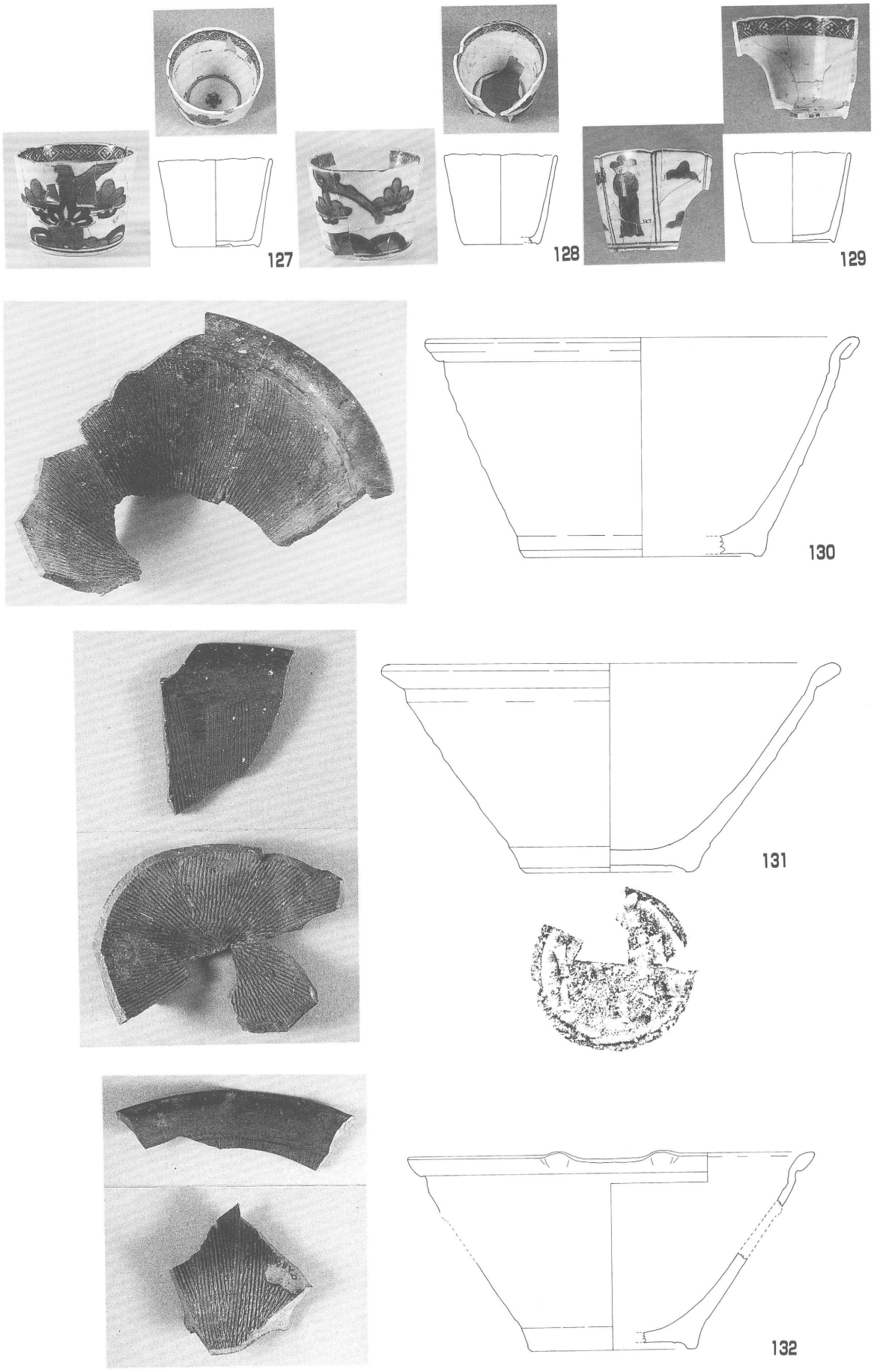


図25　4-S2　出土遺物（1/4）

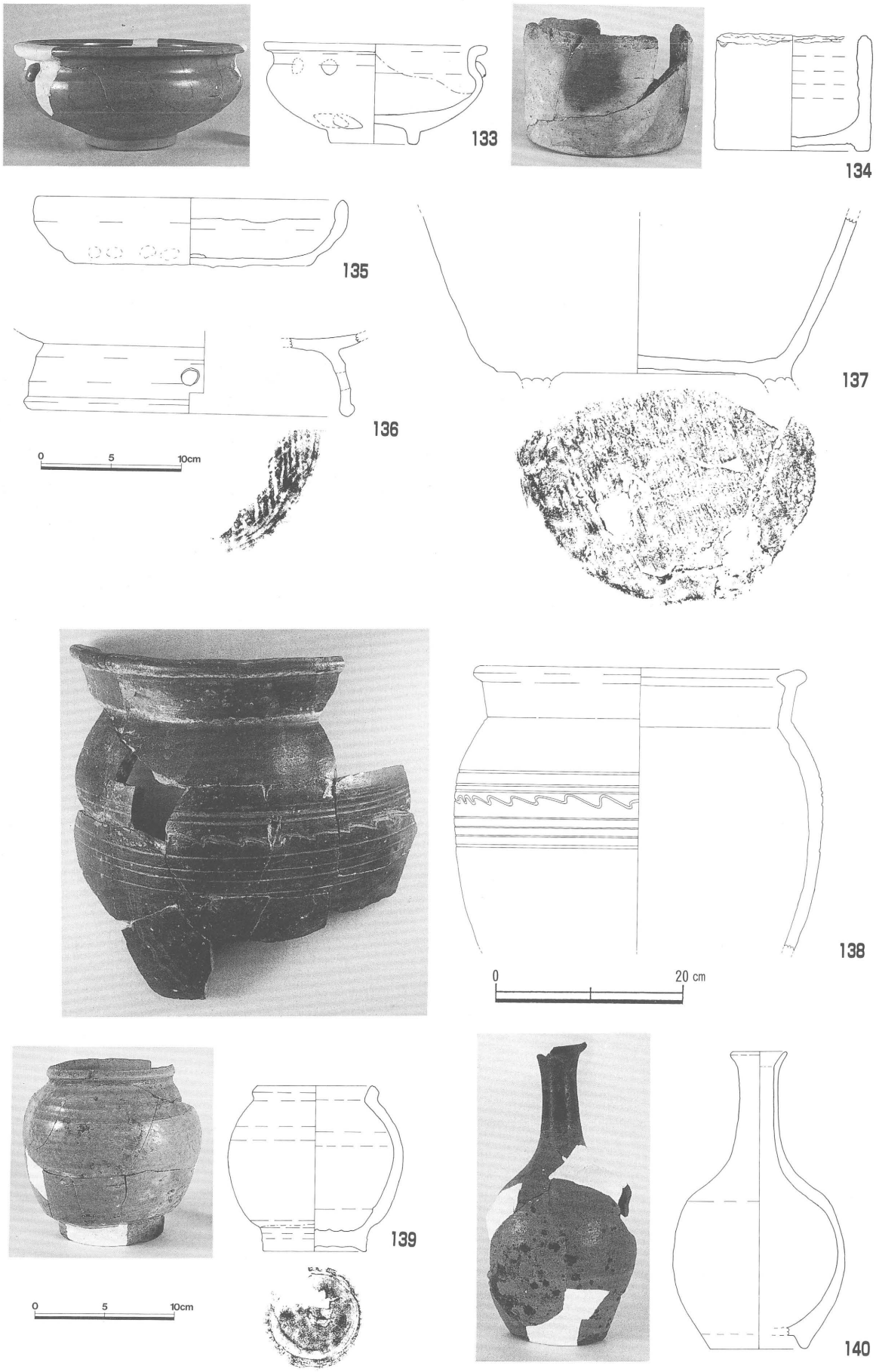


図26　4-S2出土遺物（133～137・139・140：1/4、138：1/6）

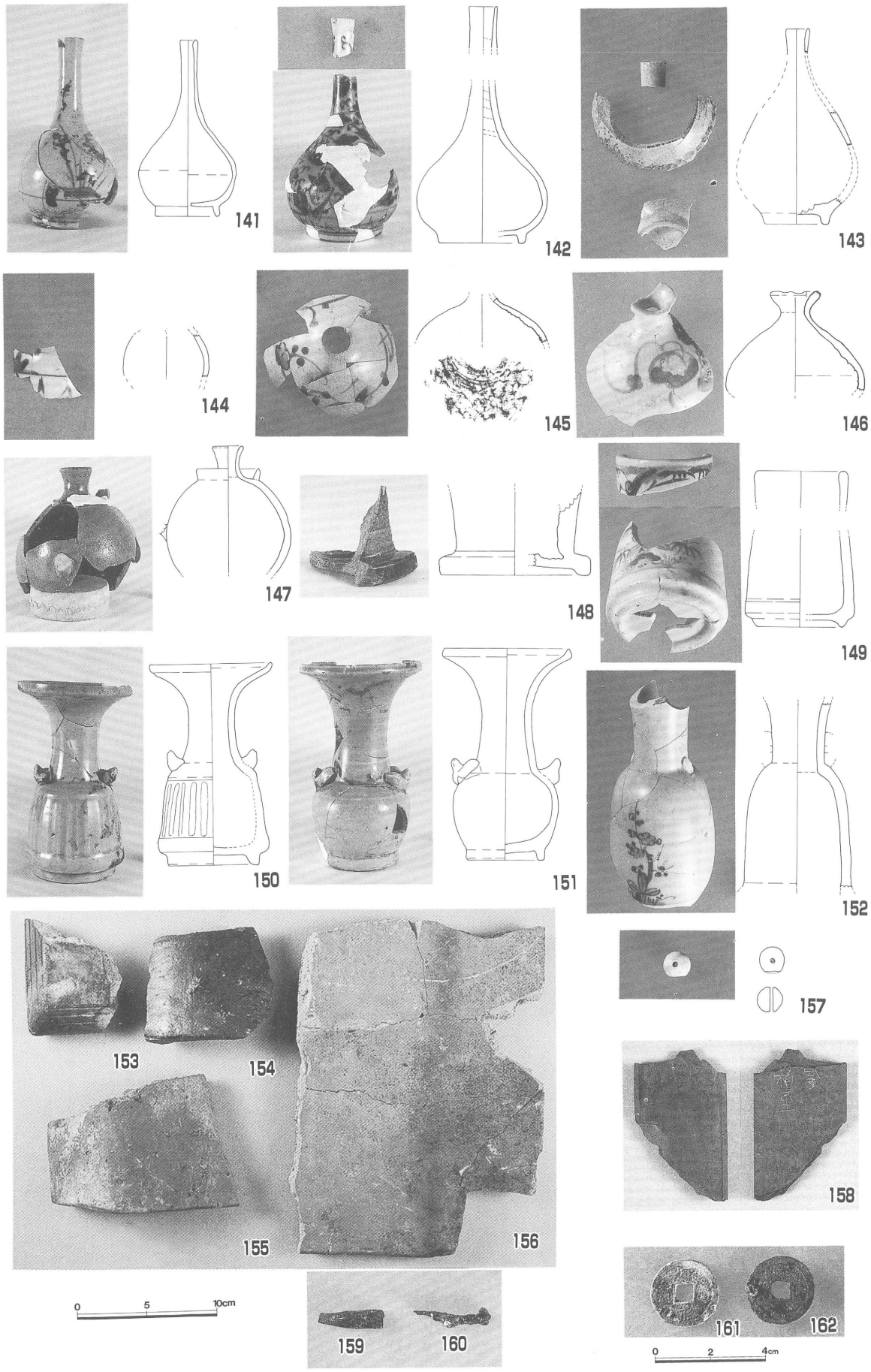


図27　4-S2出土遺物（141～160：1/4、161･162：1/2）

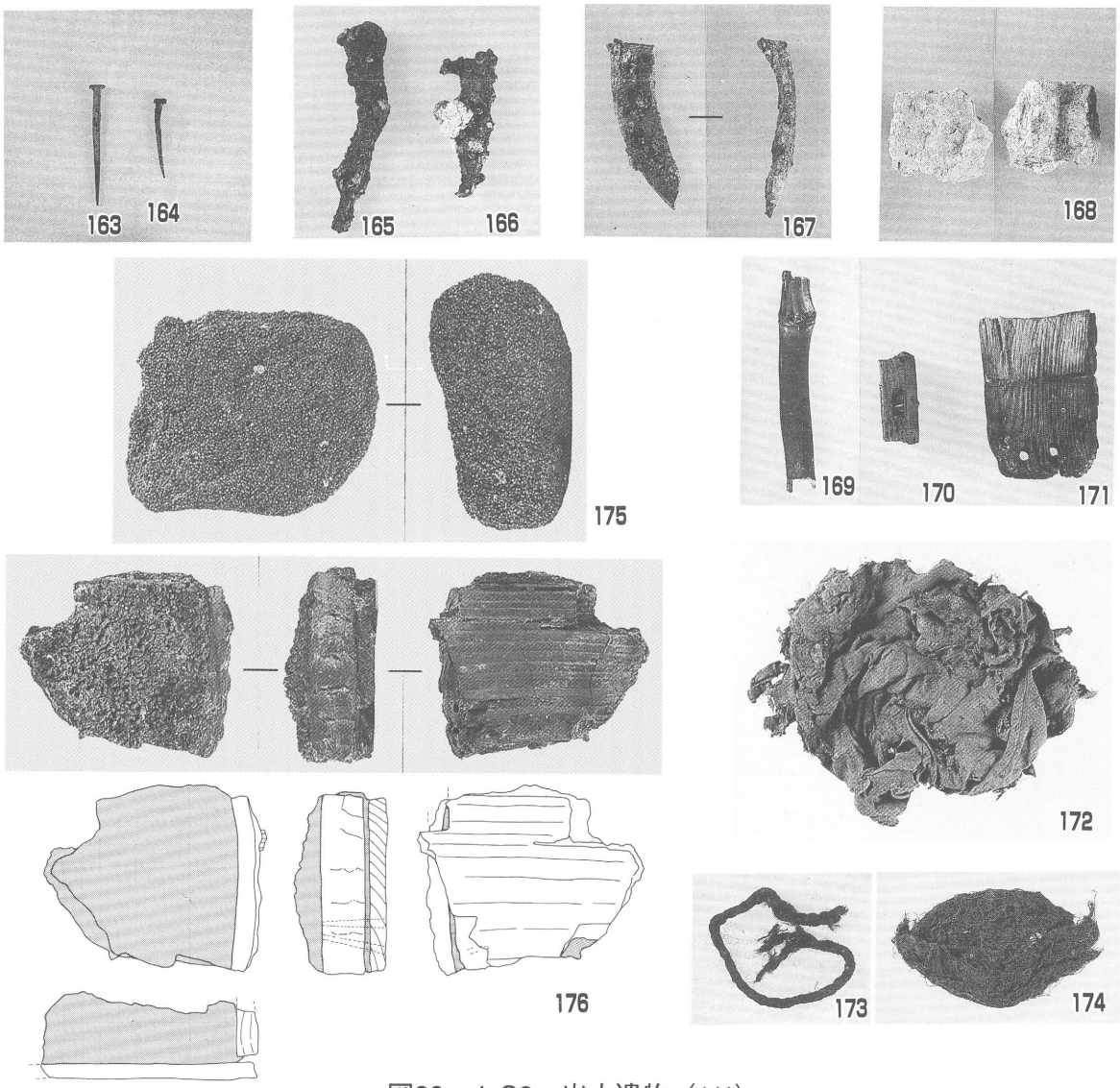


図28　4-S2　出土遺物（1/4）

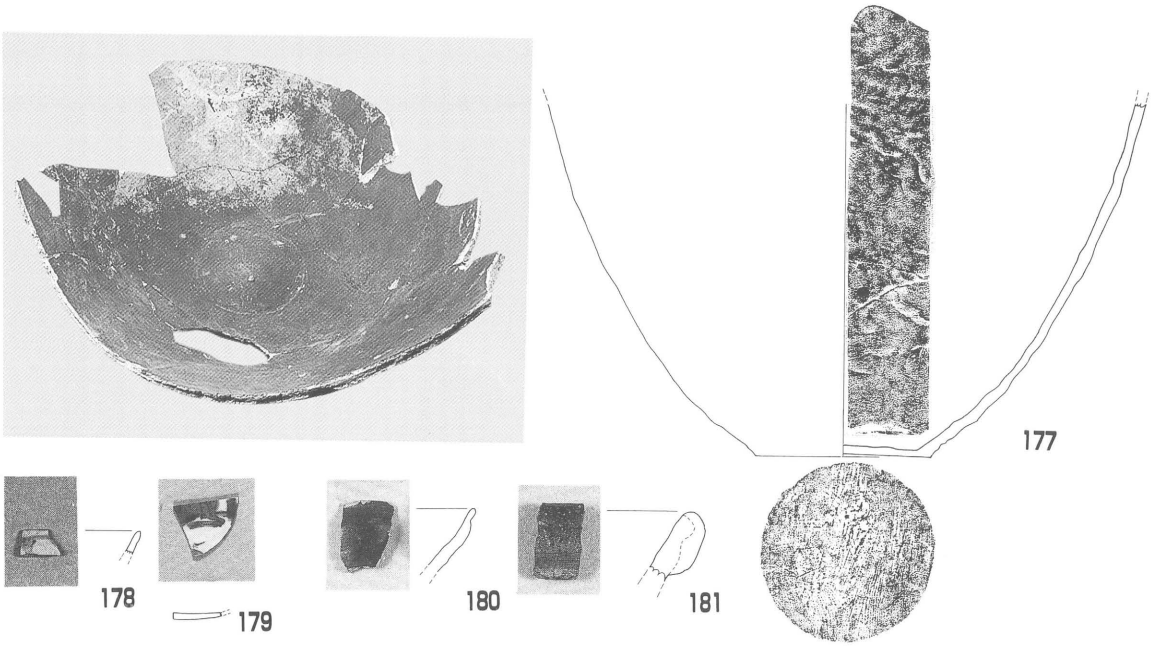


図29　4-S3出土遺物（177：1/8、178～181：1/4）

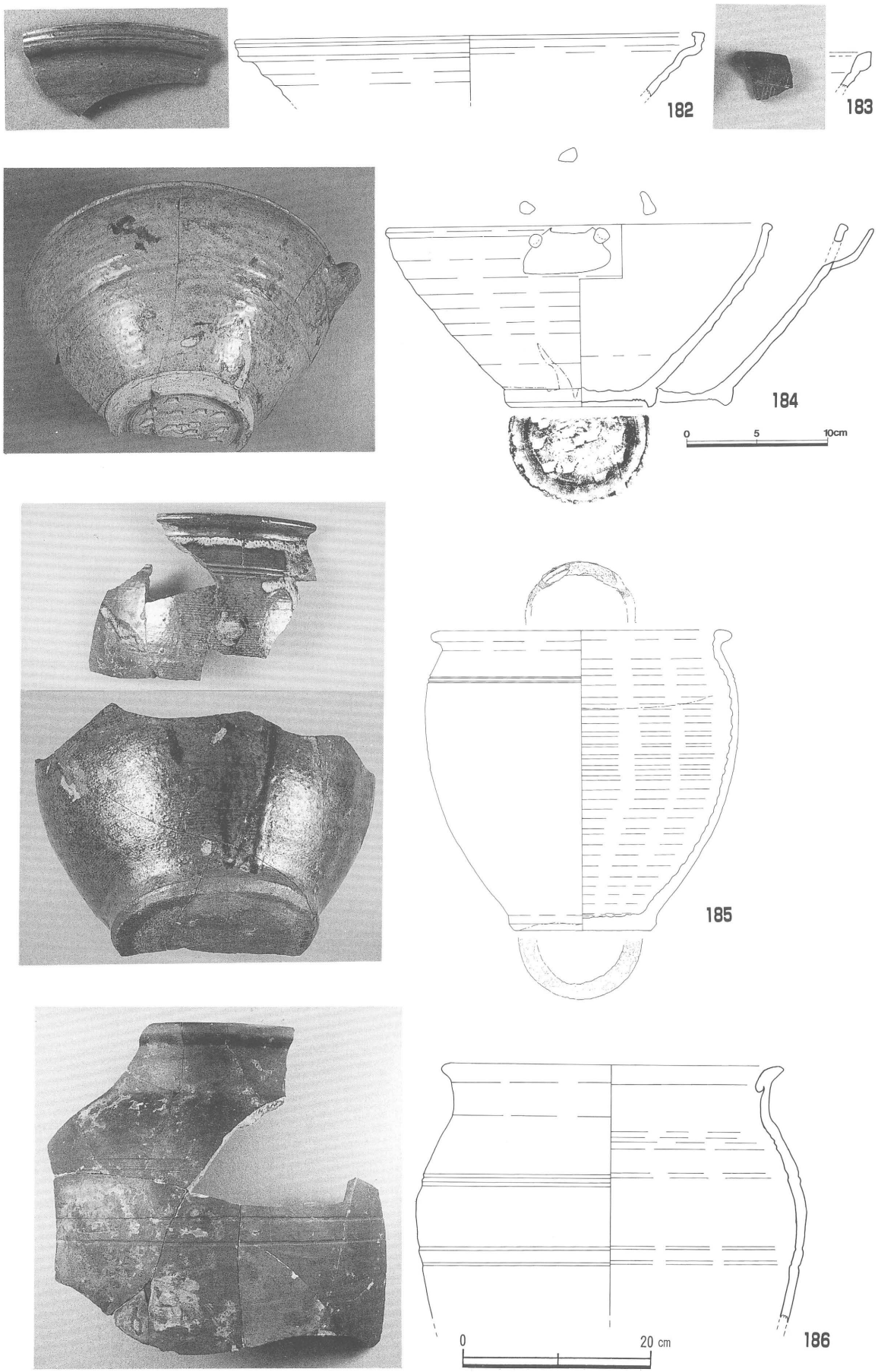
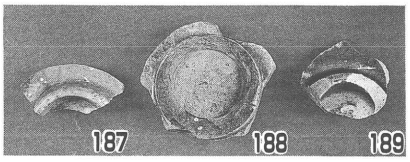
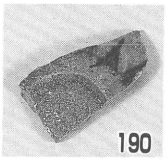
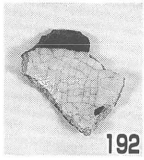
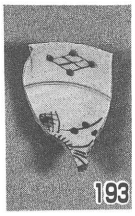


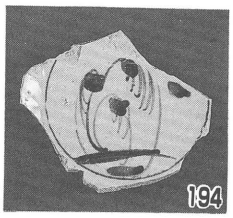
図30　5-S4出土遺物（182～184：1/4、185･186：1/6）

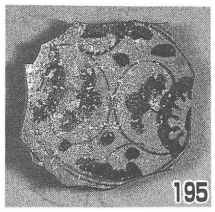


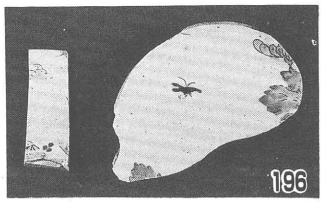


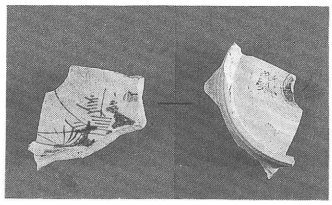


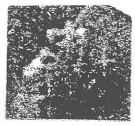




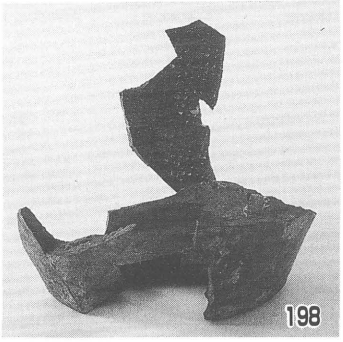




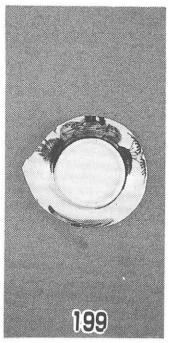


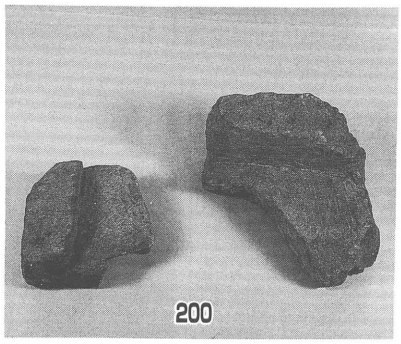


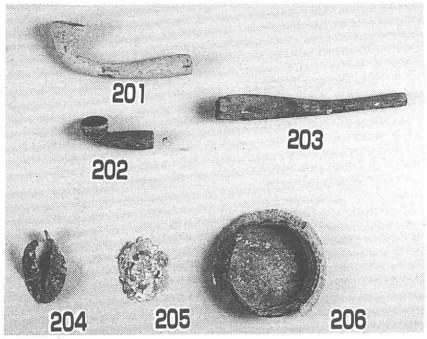
0 1 2cm

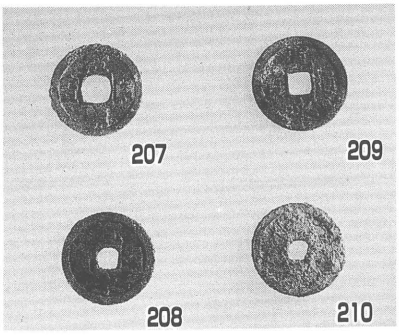


0 4 8cm









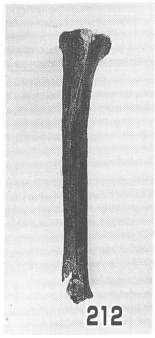


図31　遺構内・包含層出土遺物

表１　出土遺物一覧表(1)

番号	出土場所	器類	器種	胎質	釉薬絵付	備考	個体数 (A)	破片数 (B)	破片率 (B/A)
1	4－S1	碗	小碗	磁器	染付		1	1	1
2	4－S1	碗	小碗	磁器	染付		1	5	5
3	4－S1	碗	小碗	磁器	染付	焼成不良	1	1	1
4	4－S1	碗	小碗	磁器	染付	焼成不良	1	2	2
5	4－S1	碗	中碗	磁器	染付	貫入あり	1	14	14
6	4－S1	蓋	中碗蓋	磁器	染付	貫入あり	5	29	6
7	4－S1	碗	中碗	磁器	染付	貫入あり	6	100	17
8	4－S1	蓋	中碗蓋	磁器	色絵	端部金彩。銘、方形枠内不明字	4	12	3
9	4－S1	碗	中碗	磁器	色絵	口縁端金彩	2	11	6
10	4－S1	蓋	中碗蓋	磁器	色絵	端部金彩。銘、方形枠内不明字	5	36	7
11	4－S1	碗	中碗	磁器	色絵	口縁端金彩	6	61	10
12	4－S1	碗	大碗？	磁器	染付		1	2	2
13	4－S1	碗	うがい茶碗	磁器	染付		1	8	8
14	4－S1	碗	小杯	磁器	染付		5	28	6
15	4－S1	碗	小杯	磁器	染付		3	8	3
16	4－S1	碗	小杯	磁器	染付		3	19	3
17	4－S1	碗	薄手酒杯	磁器	色絵		1	7	7
18	4－S1	碗	薄手酒杯	磁器	白磁	陰刻の花文？	1	8	8
19	4－S1	碗	薄手酒杯	磁器	色絵	絵に「正」「金千両入」文字	1	10	10
20	4－S1	碗	薄手酒杯	磁器	色絵	絵に「正」文字	1	14	14
21	4－S1	碗	薄手酒杯	磁器	色絵	絵に「正」「金　」文字	1	12	12
22	4－S1	皿	灯明皿	土器			1	8	8
23	4－S1	皿	灯明皿	陶器	灰釉	須佐焼	1	1	1
24	4－S1	皿	極小皿	磁器	染付		1	3	3
25	4－S1	皿	小皿	磁器	染付		2	17	9
26	4－S1	皿	五寸皿	磁器	染付	蛇ノ目凹形高台。見込ハリ支え4	4	77	19
27	4－S1	皿	五寸皿	磁器	染付	蛇ノ目凹形高台。銘「成化年製」	7	126	18
28	4－S1	皿	中皿	磁器	染付		1	33	33
29	4－S1	皿	中皿	磁器	染付	高台内ハリ支え1、銘「成化年製」	1	46	46
30	4－S1	皿	大皿	磁器	染付	菊の陽刻。高台内ハリ支え5。二重方形枠不明字	1	28	28
31	4－S1	鉢	小鉢	磁器	染付	銘「成化年製」	1	25	25
32	4－S1	鉢	小鉢	磁器	染付		1	6	6
33	4－S1	鉢	大鉢	陶器	灰釉	須佐焼	1	1	1
34	4－S1	鉢	猪口	磁器	染付		2	33	7
35	4－S1	鉢	片口	磁器	染付	焼成不良	1	2	2
36	4－S1	鉢	片口	陶器	長石釉(内)	在地系、トビガンナ	1	21	21
37	4－S1	蓋	片口蓋	陶器	長石釉(内)	在地系、トビガンナ	1	17	17
38	4－S1	鉢	片口	陶器	長石釉(内)	在地系、トビガンナ	1	46	46
39	4－S1	鉢	擂鉢	炻器	鉄釉	焼成良好(硬質)	1	16	16
40	4－S1	鉢	擂鉢	炻器	鉄釉	須佐焼	1	37	37
41	4－S1	鉢	擂鉢	土器			1	1	1
42	4－S1	鉢	香炉	磁器	瑠璃釉(外)		1	5	5
43	4－S1	鉢	火入	陶器	灰釉(外)		1	9	9
44	4－S1	鉢	七厘	土器		前面に菊花スタンプ	1	49	49
45	4－S1	鉢	焜炉	土器			1	30	30
46	4－S1	甕	中甕	陶器	鉄釉	トビガンナ、藁灰釉流し掛け	1	57	57
47	4－S1	甕	中甕	陶器	鉄釉	飴釉流し掛け	1	27	27
48	4－S1	甕	中甕	陶器	鉄釉	飴釉流し掛け？	1	39	39
49	4－S1	甕	中甕	陶器	鉄釉？	鉄釉流し掛け	1	24	24
50	4－S1	甕	大甕	陶器	黄色釉	胎土淡褐色	1	20	20
51	4－S1	蓋	小壺蓋	磁器	染付		1	7	7
52	4－S1	壺	小壺	磁器	染付		1	10	10
53	4－S1	蓋	中壺蓋	磁器	染付		1	4	4
54	4－S1	壺	中壺	磁器	染付		1	23	23
55	4－S1	壺	中壺	磁器	染付		1	19	19
56	4－S1	蓋	中壺蓋	陶器	灰釉(外)	白色釉イッチン	1	8	8
57	4－S1	壺	中壺	陶器	灰釉	白色釉流し掛け、見込み目跡3カ所	1	49	49
58	4－S1	瓶	大瓶	磁器	白磁	化粧掛け？、高台内中央ハリ支え1カ所	1	99	99
59	4－S1	瓶	中瓶	陶器	長石釉	サビ絵	1	22	22
60	4－S1	瓶	髪油壺	陶器	藁灰釉		1	2	2
61	4－S1	瓶	花生	陶器	灰釉	糸切り後、底部不明圧痕	1	36	36
62	4－S1	瓶	筆立？	磁器	染付	蛇ノ目凹形高台	1	13	13
63	4－S1	瓶	筆立？	磁器	染付		1	10	10
64	4－S1	瓶	筆立？	磁器	染付		1	6	6
65	4－S1	瓶	筆立？	磁器	染付		1	6	6
66	4－S1	蓋	土瓶蓋	陶器		白色釉流し掛け、トビガンナ	1	2	2
67	4－S1	水注	土瓶	陶器	灰釉(内)	白色釉流し掛け、トビガンナ、菊花陽刻	1	15	15
68	4－S1	水注	急須	陶器	色絵	化粧土(外)、鉄釉？(内)	1	35	35
69	4－S1	水注	急須	陶器	長石釉	サビ絵	1	15	15
70	4－S1	水注	水滴	陶器	長石釉	不明文様の陽刻・陰刻あり	1	5	5
71	4－S1	水注	水滴	陶器	長石釉	菊花文の陽刻、大小各1個体	2	11	6
72	4－S1	不明		土器		内面スサ痕らしき凹凸	1	16	16
73	4－S2	碗	小坏	磁器	白磁		1	4	4
74	4－S2	碗	小碗	磁器	色絵		1	4	4
75	4－S2	碗	小碗	磁器	染付		4	33	8
76	4－S2	碗	小碗	磁器	染付		7	51	7
77	4－S2	碗	小碗	磁器	白磁	焼成不良	1	6	6
78	4－S2	碗	小碗	磁器	染付	コンニャク印判	2	12	6
79	4－S2	碗	小碗	陶器	長石釉	萩焼？	3	26	9
80	4－S2	碗	中碗	磁器	染付	銘、渦福	31	213	7
81	4－S2	蓋	中碗蓋	磁器	染付		4	49	12
82	4－S2	碗	中碗	磁器	染付		4	67	17
83	4－S2	碗	中碗蓋？	磁器	染付	貫入あり。広東碗蓋？	1	11	11
84	4－S2	碗	中碗？	磁器	染付	貫入あり。広東碗？	1	5	5
85	4－S2	碗	中碗	磁器	外青磁、内染付	五弁花	2	29	15
86	4－S2	碗	中碗	磁器	染付		2	9	5
87	4－S2	碗	中碗	陶器	染付	陶胎染付	3	15	5
88	4－S2	碗	中碗	陶器	長石釉	サビ絵	1	6	6
89	4－S2	碗	中碗	磁器	染付		1	1	1
90	4－S2	碗	中碗	磁器	染付		1	1	1
91	4－S2	碗	―	磁器	染付		1	1	1
92	4－S2	碗	中碗	磁器	染付	発色不良	1	2	2
93	4－S2	碗	―	陶器	鉄釉		1	1	1
94	4－S2	碗	中碗	磁器	染付	貫入あり	1	3	3
95	4－S2	碗	大碗	磁器	染付	貫入あり	1	2	2
96	4－S2	碗	中碗	陶器	藁灰釉	鉄釉流し掛け、外2・内1。1個体流し掛け無。萩焼	3	18	6
97	4－S2	碗	中碗	陶器	藁灰釉	鉄釉流し掛け、外2・内1。萩焼	1	7	7
98	4－S2	碗	紅猪口？	磁器	白磁		1	1	1
99	4－S2	碗	紅猪口	磁器	白磁		1	2	2
100	4－S2	皿	小皿	磁器	染付		1	4	4
101	4－S2	皿	小皿	磁器	染付	五弁花、貫入あり	1	12	12
102	4－S2	皿	小皿	陶器	長石釉	貫入あり。須佐焼？	1	5	5
103	4－S2	皿	小皿	磁器	染付	見込み蛇ノ目釉剥ぎ	6	67	11
104	4－S2	皿	五寸皿	磁器	染付	貫入あり、見込み蛇ノ目釉剥ぎ	1	18	18
105	4－S2	皿	五寸皿	磁器	染付	五弁花、方形枠内に渦福	1	14	14
106	4－S2	皿	五寸皿	磁器	染付	五弁花、渦福、高台畳付け砂付着	1	8	8

表２　出土遺物一覧表(2)

番号	出土場所	器類	器種	胎質	釉薬絵付	備考	個体数 (A)	破片数 (B)	破片率 (B/A)
107	4－S2	皿	中皿	陶器	灰釉	高台付近鉄釉、須佐焼。外面レンズ状剥落	1	21	21
108	4－S2	皿	中皿	陶器	灰釉	内面線刻の花文。高台内に工具痕。須佐焼	1	13	13
109	4－S2	皿	灯明皿	陶器	灰釉	須佐焼	8	17	2
110	4－S2	器台	灯明皿台	陶器	灰釉	須佐焼	9	51	6
111	4－S2	皿	灯明皿	土器			1	1	1
112	4－S2	皿	灯明皿	土器			2	6	3
113	4－S2	皿	灯明皿	土器			4	4	1
114	4－S2	皿	灯明皿	土器			2	2	1
115	4－S2	鉢？	小鉢？	陶器	灰釉？	サビ絵	1	4	4
116	4－S2	鉢	中鉢	陶器	藁灰釉	萩焼？	1	12	12
117	4－S2	鉢	片口	陶器	灰釉	高台内に工具痕。須佐焼	1	23	23
118	4－S2	鉢	―	陶器	灰釉	須佐焼	1	1	1
119	4－S2	鉢	片口	陶器	灰釉	須佐焼	1	1	1
120	4－S2	鉢	大鉢	陶器	灰釉	須佐焼	1	33	33
121	4－S2	鉢	片口	陶器	灰釉	高台内に工具痕。須佐焼	1	34	34
122	4－S2	蓋	蓋物蓋	磁器	染付		1	2	2
123	4－S2	鉢	蓋物	磁器	染付		1	9	9
124	4－S2	蓋	蓋物蓋	磁器	染付		1	18	18
125	4－S2	蓋	蓋物蓋	磁器	染付		1	15	15
126	4－S2	鉢	蓋物	磁器	染付	高台内面中央、円形に砂付着(径1.7cm)	1	37	37
127	4－S2	鉢	猪口	磁器	染付	五弁花、蛇ノ目凹形高台	2	26	13
128	4－S2	鉢	猪口	磁器	染付	蛇ノ目凹形高台	1	11	11
129	4－S2	鉢	猪口	磁器	染付	高台内全面施釉	1	11	11
130	4－S2	鉢	擂鉢	炻器	鉄釉	須佐焼	1	6	6
131	4－S2	鉢	擂鉢	炻器	鉄釉	高台内に工具痕。須佐焼	1	5	5
132	4－S2	鉢	擂鉢	炻器	鉄釉	高台内に工具痕。須佐焼	1	3	3
133	4－S2	鉢	香炉	磁器	青磁		1	34	34
134	4－S2	鉢	火入	土器			1	7	7
135	4－S2	鉢	火鉢	土器			1	9	9
136	4－S2	鉢	火鉢？	土器			1	4	4
137	4－S2	鉢	火鉢？	土器		三足痕跡あり	1	18	18
138	4－S2	甕	大甕	陶器	鉄釉	内面格子タタキ痕	1	59	59
139	4－S2	壺	小壺	陶器	灰釉？	高台内に工具痕。須佐焼？	1	20	20
140	4－S2	瓶	中瓶	陶器	外灰釉、内鉄釉	外面口縁～頸部鉄釉	1	16	16
141	4－S2	瓶	小瓶	磁器	染付		4	36	9
142	4－S2	瓶	小瓶	磁器	染付		1	23	23
143	4－S2	瓶	小瓶	陶器	灰白色釉	外面レンズ状の小剥離痕多い	1	6	6
144	4－S2	瓶	小瓶	磁器	染付		1	1	1
145	4－S2	瓶	髪油壺？	磁器	染付	内面レンズ状の小剥離痕多い	1	10	10
146	4－S2	瓶	髪油壺？	磁器	染付		1	3	3
147	4－S2	瓶	油徳利	陶器	灰釉	須佐焼	1	9	9
148	4－S2	瓶	花生？	陶器	灰釉	藁灰釉の流し掛け？	1	1	1
149	4－S2	瓶	花生？	磁器	染付		1	5	5
150	4－S2	瓶	仏花瓶	磁器	青磁		1	12	12
151	4－S2	瓶	仏花瓶	磁器	青磁		3	47	16
152	4－S2	瓶	仏花瓶	磁器	染付		1	12	12
153	4－S2	瓦	海鼠瓦？			いぶし瓦、各辺に沈線4本			
154	4－S2	瓦	丸瓦		来待釉?	赤瓦			
155	4－S2	瓦	桟瓦		銹釉	赤瓦			
156	4－S2	瓦	平瓦？		銹釉?	赤瓦			
157	4－S2		緒締め	石					
158	4－S2		硯	石		裏面に線刻「金　柏屋」			
159	4－S2		キセル	銅					
160	4－S2		キセル	銅					
161	4－S2		銅銭	銅		寛永通寶(新寛永)			
162	4－S2		銅銭	銅		寛永通寶(新寛永)			
163	4－S2		釘	鉄					
164	4－S2		釘	鉄					
165	4－S2		釘	鉄					
166	4－S2		釘	鉄					
167	4－S2		鉄製品	鉄					
168	4－S2		壁土			木舞竹の圧痕あり			
169	4－S2		木舞竹			炭化			
170	4－S2		材			炭化、ほぞ穴			
171	4－S2		材			炭化、穴2カ所			
172	4－S2		布			炭化			
173	4－S2		紐			炭化、太さ5mm			
174	4－S2		糸			炭化、			
175	4－S2		穀物			炭化、ヒエ			
176	4－S2		穀物			炭化、コメ、松材付着			
177	4－S3	甕	大甕	土器		器壁タタキ、底部圧痕、内面一部に灰褐色付着物	1	35	35
178	4－S3	碗		磁器	染付	中国、16C末？	1	1	1
179	4－S3	皿		磁器	染付	中国、16C第3四半期	1	1	1
180	4－S3	碗		陶器	鉄釉	瀬戸美濃系、天目、16C	1	1	1
181	4－S3	壺		炻器		備前、16C	1	1	1
182	5－S4	鉢	大鉢	陶器	灰釉	須佐焼	1	1	1
183	5－S4	鉢	擂鉢	炻器	鉄釉		1	1	1
184	5－S4	鉢	片口	陶器	灰釉	高台内に工具痕。胎土、暗黄褐色	1	10	10
185	5－S4	甕	大甕	陶器	鉄釉	海鼠釉の流し掛け	1	23	23
186	5－S4	甕	大甕	陶器	鉄釉		1	50	50
187	3－S5？	碗		磁器	青磁	中国、15C			
188	3－S5？	碗		磁器	青磁	中国、15C			
189	5区22層	碗		磁器	青磁	中国、15C			
190	6区	皿		磁器	染付	中国、16C前半。呉須発色不良			
191	3－S2	碗		陶器	灰色釉	朝鮮、16C、雑釉碗			
192	6区	碗		陶器	長石釉	口縁鉄釉。胎土、淡明褐色。志野16末～17C初			
193	3－S4	皿		磁器	染付	17C中			
194	3区4焼土	皿		磁器	染付	17C中、高台畳付け砂付着			
195	5－S17	皿		磁器	染付	17C、呉須発色不良			
196	3区4焼土上	鉢？		磁器	色絵	17C、柿右衛門様式			
197	3区4焼土	碗？		陶器	色絵	17C後半～18C前半、京焼風陶器。銘「中村金」			
198	5－S14	甕		陶器	鉄釉	17C？、内面格子タタキ			
199	6区	蓋	碗蓋	磁器	染付	19C前半、広東碗の蓋			
200	4区2焼土		石製品	石		流し台？、玄表石(地元産、角閃石安山岩)			
201	5区3焼土		キセル	銅					
202	4区2焼土		キセル	銅					
203	5区排土中		キセル	銅					
204	5区2焼土		切羽	銅					
205	3区攪乱土		飾り金具	銅		外面金メッキあり			
206	3区4焼土			銅		引戸取っ手			
207	5－S17		銅銭	銅		元祐通寶			
208	5区2焼土		銅銭	銅		寛永通寶(古寛永)			
209	4区1焼土		銅銭	銅		寛永通寶(文銭)			
210	5区4焼土		鉄銭	鉄		銭種不明			
211	4区3焼土上		貝			アワビ			
212	3－S5		骨			ニホンシカの脛骨左			

Ⅳ．まとめ

これまで文献や伝承などで知られていた江戸時代の大火の跡が、現在も町並みの下に埋まっていることが明らかとなった。しかも、遺存状況良好な部分では、焼土層６枚の層位的な堆積状況が確認でき、その焼土層下面の多くには遺構が残されていることも分かった。このことは、今回のような小規模な調査であっても、層位的な発掘をおこなうことで記録に残されていない江戸時代の町並みの詳細な変遷を追うことができることを意味している。また、遺構内から出土した一括資料は、一回の火災によって廃棄された一時期の生活品のセットであり、当時津和野城下で流通し使用されていた具体的な生活品を知ることが可能となる。

今回の調査対象地は、城下町北端のかつて町屋があったところである。遺構の前後関係が比較的つかみやすかった３・５区についてみると、火災の前後でもほぼ同じ屋敷割りが継続することが多かった事が分かる。具体的には、３区基礎石列（３－Ｓ７・Ｓ８・S10・S11・S12・S15)、５区北端の基礎石列（５－S26・S27)、５区南端のタタキ面（５－S21・S22・S23）があげられる。これらの遺構と城下絵図に描かれた屋敷との対比は、調査面積が狭いこともあり困難であった。その中で、４－Ｓ２出土遺物には「金　柏屋」と線刻された硯（図27－158）がある。４－Ｓ２とは時期が異なるものの、「柏屋」という屋号は元禄期絵図の調査対象地付近（図４、●印）にあり、考古資料と文献史料を結ぶ数少ない資料として注目される。特徴的な遺構としては、穀物を保管していた半地下式の穴蔵（４－Ｓ２)、小便専用の便槽と推定される埋甕（４－Ｓ３）などが検出された。

今回の調査では攪乱が激しく遺構面も接近していることから、各遺構・包含層の厳密な時期特定は困難であり、概ねの時期的傾向を把握するのみとした。焼土を伴う上層では 17～19Ｃ代の遺物が出土し、焼土を伴わない下層では 15～16Ｃ代の遺物が主に出土している。遺構内遺物の中で、４－Ｓ１と４－Ｓ２出土遺物は種類も豊富で、層位的に前後関係のつかめる非常に良好な一括資料であった。このうち、磁器の大部分は肥前系、陶器は須佐焼（山口県須佐町）および在地系の石見焼が大半を占めているようである。地理的に近い須佐焼についてみると、擂鉢、こね鉢、片口、中皿など比較的大型のものが主に出土しており、小型のものは灯明皿、灯明皿台が出土している。小型品のうち、碗類・鉢類については須佐焼が出土しておらず、代わりに磁器が補完している傾向がみられる。

４－Ｓ１・Ｓ２出土品の中にはいずれも、安政元年（1854）頃開窯し、後に津和野藩御用窯となった喜阿弥焼（現在の島根県益田市)、および安政５年（1858）開窯し、後に津和野藩から資金を貸し付けられた白上焼（現在の島根県益田市）に類するものが出土していないことから、これらの開窯以前であると言える。４－Ｓ１出土品には、コンニャク印判を用いた五弁花文や渦福銘がすでに見られないこと、1820 年代以降に位置付けられている端反碗が碗の主体であることなどから 19Ｃ第２四半期の資料であると考えられる。このことは、４－Ｓ１出土の図 16－37・38 が益田市相生遺跡の物原出土の行平と同様のものであり、相生遺跡窯跡の操業の下限が天保年間（1830～1843）あたりになると考えられていることと矛盾しない。４－Ｓ２出土品には、コンニャク印判を用いた五弁花文や青磁染付碗（図 21－85）など 18Ｃ代の特徴を持つものがある。そのほか、高台部を欠損しているため断定はできないものの、図 21－83・84 が 1780 年代に現れるとされる広東碗であるとすれば、４－Ｓ２は 18Ｃ第４四半期の資料である可能性が高いと考えられる。

江戸時代の大火についてまとめた研究成果を参考にすると、発掘調査地点が火災に見舞われた可能性のある年代としては、嘉永６（1853)、享和元（1801)、安永２（1773)、宝暦１３（1763)、宝永２（1705)、

元禄１１（1698)、寛永７（1630）年が挙げられる。また、近現代にこの場所で火災があったということは伝えられていない。このうち、寛永７（1630）年の火災については、後述するように現在のところ出土遺物の裏付けに乏しい。４－Ｓ１、４－Ｓ２の時期を比定すると、４区第１焼土下面で検出した４－Ｓ１は嘉永６（1853）年、４区第２焼土下面で検出した４－Ｓ２は享和元（1801）年に該当する可能性が高い。これを基準にして、層位的な上下関係から他の遺構面・焼土の概ねの時期を求めるとすれば、４区３層下面は嘉永６（1853）年以降、４区10層タタキ面及び４区第３焼土は18Ｃ後半、４区第４焼土および４区18層は17Ｃ中葉～18Ｃ前半に相当している可能性がある。

他の調査区については、良好な一括資料が少なく詳細な時期比定は困難であるが、４区との概ねの対応関係から３区第４焼土及び５区第４・５焼土が17Ｃ中葉～18Ｃ前半、３区第３焼土以上及び５区第３焼土以上が18Ｃ後半～19Ｃ中葉に相当している可能性があると大きく捉えておきたい。６区については攪乱が著しく、他の調査区との対応関係は不明な点が多い。これらの時期比定については、文献に記された火災が実際にこの場所に及んでいたのかという問題も含めて、今後の発掘調査の積み重ねを通じて検証していく必要があることは言うまでもない。

ところで、今回の調査では17Ｃ前葉の遺物が志野（図31-192）以外ほとんど見当たらず、他には試掘１・２区で唐津焼の皿が出土した程度であるということには注意しておく必要がある。調査面積が狭いこと、及び３区下層がトレンチ調査に留まってしまっていることも考慮しなければならないが、この場所で本格的な城下町建設が始まるのは17Ｃ中葉以降であり、中世からの集落とは一時期断絶があった可能性もある。その一方、下層出土遺物の中には貿易陶磁器（図31-187～191）など、明らかに江戸時代より前に遡る資料が含まれている。このことは、坂崎氏入封による本格的な城下町建設以前に既に人々が居住していたことを意味しており、本町北端から祇園町がかつて下市と呼ばれた中世の市場集落であったと考えられていることと符合する。

16Ｃ以前の集落を考える上で興味深いのが、遺構の主軸の問題である（図5)。３・４区についてみると、17Ｃ中葉以降である第４焼土下面以上の遺構面では、Ｎ３°～13°Ｅにおさまり、いずれも座標北より東に主軸を振っている。この主軸は、調査地東側の祇園町通りと並行するものではなく、南側の風呂屋町（ふろやちょう）通りとも直交するものでもなく、その中間の角度に相当している。一方、16Ｃ後半と考えられる４－Ｓ３の主軸はＮ８°Ｗ、同様の時期と推定される３－Ｓ６もやや西に主軸を振っている可能性があり、いずれも座標北より西に主軸を振っている。この主軸は、祇園町通りにほぼ並行するものの、風呂屋町通りには直交方向とならない。遺構の主軸と道路軸が関連し合うとすれば、16Ｃ代には祇園町通りしか存在しておらず、その道路軸に影響を受ける形で遺構の主軸が決定されたのではないかと考えられよう。その後、遺構の主軸が変化することは、17Ｃ代以降城下町建設の進展にともなって新たに風呂屋町通りができたことを示している可能性があり、その結果、祇園町通り・風呂屋町通りという２本の道路軸の影響を受ける形で遺構の主軸が決定されはじめた可能性があるのではないかと考えられる。さらに、厳密に４－Ｓ３の主軸を検討すると、祇園町通りの主軸Ｎ２°Ｗよりもさらに主軸を西に振っていることが分かる。遺構の主軸と道路の関係が極めて密接なものであるとするならば、16Ｃ代の道路は17Ｃ代以降の祇園町通りとは異なっていたと考えることもできる。このことは、祇園町南東に設けられた城下町特有の“喰違い”の成立前後の状況を考える上で興味深いことであり、今後は近世城下町の母体となったと想定される中世の道を確認していく必要があるだろう。

５・６区の主軸についてみると、５区では第４・５焼土下面でN27°Ｅであったものが、第２・３焼

土下面ではＮ６°Ｅとなっている。６区では第３焼土・10層下面でN29°Ｅであったものが、第２焼土下面ではN13°Ｅとなっている。５・６区の場所は、不整四角形をした町割りの鋭角の部分に相当しており、南側の風呂屋町通りを基準とした屋敷割りをすればN27～29°Ｅ前後の主軸となり、東側の祇園町通りを基準とすればＮ６～13°Ｅ前後の主軸となるためではないかと考えられる。先述したように屋敷割りは火災の前後でも継続されることが多いが、これらの例では火災を契機に屋敷割りに大きな変化があったことも示している。今後、このような調査を積み重ねていくことで、津和野城下町の具体的な町並みの変遷を明らかにすることができるものと考えられる。

引用・参考文献

1．沖本常吉編『津和野町史』第1～3巻　1970～1989
2．森澄泰文「後日物語」『上納紙制度と紙漉哀話―義民　仁右衛門父子物語―』津和野ものがたり7　1976
3．村上勇編『島根の工芸』島根県立博物館1987
4．原宏編『日本やきもの集成』8山陰　1981
5．平田正典『石見粗陶器史考』1979
6．島根県教育委員会『島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅲ　窯業関係遺跡』　1985
7．川本町教育委員会『邑智郡川本町　谷戸経塚・木谷石塔発掘調査報告書』　1987
8．島根県教育委員会『石見空港建設予定地内遺跡　埋蔵文化財発掘調査報告書』　1992
9．山口県教育委員会『生産遺跡分布調査報告書　窯業』山口県埋蔵文化財調査報告書第74集　1983
10．須佐町教育委員会『須佐唐津窯』　1971
11．山口県教育委員会『須佐唐津窯』山口県埋蔵文化財調査報告書第71集　1983
12．山口県教育委員会『萩焼古窯』山口県埋蔵文化財調査報告書　1990
13．大橋康二・西田宏子監修『別冊太陽　古伊万里』1988
14．大橋康二『肥前陶磁』考古学ライブラリー55　1993
15．江戸陶磁土器研究グループ『シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅰ』1992
16．江戸陶磁土器研究グループ『シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ』1996
17．新宿区内藤町遺跡調査会『東京都新宿区内藤町遺跡―放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書―』1992
18．宇野隆夫「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集　1992

年次	月日	時刻	風向	出火	類焼被害
寛永 二(1625)	三、八			家中屋敷	殿町（御殿）、家中、町屋
〃 七(1630)	五、一四		南	本町・吉右衛門	本町四ツ角より新町、魚町、鉄砲丁
元禄一一(1698)	八、一六			永明寺	全焼
〃 （〃）	一〇、八			幸盛寺	町屋四〇軒
宝永 二(1705)	四、一七	前十時	南	下中島	家中、町屋（九三〇軒）、外、社五
				布施太郎兵衛	寺一四　死者三
〃 三(1706)	五、二				興源寺、溝手一五六間成る
〃 四(1707)					新橋架設（避難橋）
正徳 四(1714)				町方火災頻々	
享保一三(1728)	三、一〇			永明寺	全焼
延享 二(1745)	六、三五				柳村蔵方吉松仁右衛門父子処刑
〃 四(1747)	三、二四			永明寺	本堂、庫裡
宝暦 八(1758)	一、四	夜		幸栄寺	全焼
〃 （〃）	三、一四	前四時		米原七郎左衛門組	足軽屋敷一九軒
〃 （〃）	三、二一	夜一二時	南	小頭佐藤孫右衛門	清水町全部その他五六軒
				上市・河町大庭利右	
				衛門真屋	
〃 一一(1761)	五、一五	前二時	南	清水町、近江屋	片河　足軽屋敷七一軒　町屋一七軒
				（忠右衛門）	小社、庵各一軒
〃 一三(1763)	七、三〇	夜一二時	南強	森八王子社下	森村　殿町全部　社寺共一、四五九
				豆腐屋（長吉）	軒
明和 三(1766)	二、四			清水町	足軽屋敷一〇軒　清水町全部
〃 （〃）	四、二五			小坂　布施田沢右衛	小坂五七軒
				門組兼右衛門	
安永 二(1773)	五、三	夜	南烈風	中座、高崎、橋元	小坂より下殆んど全部（土蔵全部）
			飛火	畳屋十右衛門	一、四二四軒　社二　寺八　残り五
享和 元(1801)	三、一七		北烈風	下市　舛形屋庄蔵	六六軒下中島西側　光明寺下少々
文化 四(1807)	三、一		南	上市	町屋五六六軒　家中七七軒
				足軽安右衛門	杉片河まで二四五軒
天保 五(1834)				殿町　大岡平助	牧図書　家老宅一軒
嘉永 六(1853)	四、一六	前一二時	南飛火	法音寺の下　豊田	全焼一、七六〇軒　家中一、一〇六
				勝助組為右衛門	軒　町方五六八軒　地方八六軒　寺
					二六軒　社二五軒　幸橋　大橋　死
					者二五人残り法音寺下六軒　中座橋
					上高崎門前七軒太鼓谷七軒　祇園社
					天神社　光明寺　信盛寺　常光寺
明治 三(1870)	五、二	夜	西南	横堀　長門屋	上中島　堀内　代官丁三五〇軒

表３　津和野城下火災略年表（文献２）

祇園町遺跡出土遺物の自然科学分析

環境考古研究会　金原正明・金原正子

１．はじめに

トイレ遺構等の糞便の堆積物は、寄生虫卵密度、花粉群集組成、種実群集組成において、特異性を示し、他の堆積物と識別することができ、トイレ遺構を識別することが可能である。また、その遺体群集から、今まで以上に直接的に食べた食物を探ることができる。祇園町遺跡では火災跡から検出された埋桶、埋甕の堆積物の寄生虫卵分析、花粉分析、種実同定からトイレ遺構の検討を行い、火災による炭化種実および炭化材の樹種を行う。

２．試料

試料は、近世の火災跡の２－Ｓ１（埋桶）の16層、17層、18層中央、18層東端、18層西端、３－Ｓ５（湿地？）の23層、４－Ｓ３（埋甕）の埋土上、埋土下の８点を寄生虫卵分析と花粉分析を行い、４点の種実同定を行った。

炭化種実、炭化材、炭化物は計31点を対象とした。炭化材は炭化種実と付着しており７点あった。

３．寄生虫卵分析

（１）方法

寄生虫卵の分離抽出は、寄生虫卵に以下の物理化学処理を加えて行った。

１）堆積物（試料）１ccを採量し、脱イオン水を加え撹拌する。

２）篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。

３）25%フッ化水素酸を加え、２・３度混和しつつ、30分間静置する。

４）遠心分離器によって水洗後、残渣を2分する。

５）片方にアセトリシス処理を施す。

６）両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入し、それぞれ標本を作製する。

７）生物顕微鏡下で直線視野法によって検鏡・計数を行う。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、２分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

（２）結果

１）２－Ｓ１（埋桶）

寄生虫卵は16、17層ではやや低密度であったが、18層では比較的高い密度で検出された。最も寄生虫卵密度の高い18層西端では試料１cc中に1000個以上の密度で検出された。回虫卵が最も多く、鞭虫卵、異形吸虫卵がやや多い。他に肝吸虫卵、日本海裂頭条虫卵、マンソン裂頭条虫卵が検出された。

２）３－Ｓ５（湿地？）の23層

やや低密度で200個程度が検出された。回虫卵、鞭中卵、異形吸虫卵が検出された。

３）４－Ｓ３（埋甕）

埋土上、埋土下とも寄生虫卵は検出されなかった。

4．花粉分析

（1）方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

1）5％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。

2）水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂　粒の除去を行う。

3）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。

4）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：1濃　硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。

5）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。

6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレ　パラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離1500rpm、2分間の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、形態的特徴および所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

（2）結果

1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉14、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉23、シダ植物胞子2形態の計41である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、カバノキ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、サンショウ属、ブドウ属、ツタ、ツツジ科、ニワトコ属－ガマズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、マメ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、サジオモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ワレモコウ属、アリノトウグサ属－フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、オオバコ属、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属、ベニバナ

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

２）２－Ｓ１（埋桶）

イネ属型を含むイネ科が優占し、他は樹木花粉も草本花粉も低率である。樹木花粉ではマツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属、草本花粉ではアカザ科－ヒユ科、アブラナ科、ソバ属などが出現する。

３）３－Ｓ５（湿地？）の23層

イネ科が優占し、樹木花粉のマツ属複維管束亜属、草本花粉のアカザ科－ヒユ科、ヨモギ属、アブラナ科、ソバ属などが伴われる。

４）４－Ｓ３（埋甕）

極めて花粉が少なく、特徴が示されない。

５．種実同定

（１）方法

種実の分離抽出は以下の方法で行った。

１）試料（堆積物）を0.25mm篩を用いて水洗選別を行う。

２）残渣を肉眼および実体顕微鏡で観察し、同定計数を行う。

同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、同定レベルによって種、属、科などの階級で分類する。出土した単体試料等においても肉眼および実体顕微鏡で観察し同定を行う。

（２）結果

１）２－Ｓ１（埋桶）

16層、17層、18層西端は種実が少ない。食用となる種類はキイチゴ属、ウリ類がわずかに検出された。他にヒサカキ属、カヤツリグサ科、アカザ属が検出された。

２）３－Ｓ５（湿地？）の23層

ナデシコ科が多く、アカザ属、カヤツリグサ科、カタバミ属、ナス科がへ伴われ、タカサブロウ、キク科も出現した。

６．トイレ遺構の可能性について

２－Ｓ１（埋桶）、３－Ｓ５（湿地？）、４－Ｓ３（埋甕）の分析結果では、２－Ｓ１（埋桶）からやや高密度の寄生虫卵が検出された。花粉分析結果では、２－Ｓ１（埋桶）、３－Ｓ５（湿地？）において、イネ科が優占し、食物と関連するものとしてはアブラナ科とソバ属が低率に出現した。４－Ｓ３（埋甕）は寄生虫卵が出現せず、花粉は極めて低密度であった。種実同定結果では、２－Ｓ１（埋桶）から少量の種実が検出され、食用となる種類もわずかに検出された。３－Ｓ５（湿地？）はナデシコ科を主とし雑草類ばかりであった。

以上からみて、２－Ｓ１（埋桶）の堆積物は糞便を比較的多く含むとみなされ、２－Ｓ１（埋桶）はトイレ遺構である蓋然性を持つ。３－Ｓ５（湿地？）では、寄生虫卵の汚染があり、糞便が汚染的に混ざるような環境であった。種実は雑草類のみであるため、トイレ遺構ではないと推定される。４－Ｓ３（埋甕）は寄生虫卵が出現せず花粉もあまり含まれていないが、埋甕である瓦質土器に灰色から褐色の付着物もあり、小便器であった可能性が示唆される。

7．炭化種実、炭化物の同定結果

（１）方法

炭化種実は、比較的多量であり、試料によっては板状の炭化材が付着していた。形態を実体顕微鏡で観察し、同定を行った。炭化種実はいずれも同種のものの塊であった。重さを計った。

（２）結果

同定結果を表５に示す。同定されたのは、イネ（コメ）とヒエであった。以下に特徴を記す。

１）イネ　*Oryza sativa* L.　果実（炭化米）　イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。焼けているため、形態が不鮮明になっているものがあり、表には？を付けた。

２）ヒエ　*Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno　果実　イネ科

穎（籾殻）の付いた状態のもので、円形を呈し、表面には微細な縦方向の模様がある。

３）その他

他に繊維塊や植物遺体片があるが同定には至らなかった。写真に示す。

（３）観察結果について

コメ（炭化米）とヒエは同種のものの塊であり、板材が付着するものがあるため、同種のものが櫃などの容器に入って保存されていたとみられる。

8．炭化材の樹種同定

（１）方法

試料は割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

２）結果

結果は表６に示し、分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

１）マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen. *Diploxylon*　マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属にはクロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

２）不明　unknown

本試料には、木材は含まれていない。

（３）所見

ニヨウマツ類（マツ属複維管束亜属）の板材であり、穀類が付着しているため、マツ材でできた容器の可能性がある。

参考文献

Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard (1992) Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Jounal of Archaeological Science, 19, p.231-245.

金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫．藤原京跡の便所遺構－藤原京７条１坊－，奈良国立文化財研究所，p.14-15.

金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物．医動物学，新版臨床検査講座，８，医歯薬出版，p.9-55.

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.

金原正明・松井章・金原正子（1994）便所堆積物から探る古代人の食生活．助成研究報告（平成４年度），財団法人味の素食の文化センター，p.35-48.

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.

佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

表1　祇園町遺跡における寄生虫卵分析結果

分類群		2-S1（埋桶）					3-S5(湿地?)	4-S3（埋甕）	
学名	和名	16層	17層	18層中央	18層東端	18層西端	23層	埋土上	埋土下
Helminth eggs	寄生虫卵								
Ascaris	回虫卵	9	10	23	52	88	16		
Trichuris	鞭虫卵	1	2	4	21	27	7		
Clonorchis sinensis	肝吸虫卵				2				
Metagonimus-Heterophyes	異形吸虫卵	3			4	4	5		
Diphyllothrium nihonkaiense	日本海裂頭条虫卵			1					
Diphyllobothoyium mansoni	マンソン裂頭条虫卵		1	1					
Unknown eggs	不明虫卵			1					
Total	計	13	13	30	79	119	28	(-)	(-)
	試料1cc中の寄生虫卵密度	2.1×10^{2}	1.2×10^{2}	3.9×10^{2}	1.1×10^{3}	1.3×10^{3}	3.4×10^{2}	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

表2　祇園町遺跡における花粉分析結果(1)

分類群		2-S1（埋桶）				
学名	和名	16層	17層	18層中央	18層東端	18層西端
Arboreal pollen	樹木花粉					
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	17	3	20	8	6
Cryptomeria japonica	スギ	5	1	2	1	1
Betula	カバノキ属	1				
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ					
Castanea crenata	クリ	2	3	1	1	
Castanopsis	シイ属	1		1	2	1
Fagus	ブナ属					
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	22	1	6	6	27
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	6	2	1	3	1
Zanthoxylum	サンショウ属	2				
Vitis	ブドウ属	2	1	10		
Parthenocissus tricuspidata	ツタ					1
Ericaceae	ツツジ科					1
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属-ガマズミ属				1	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉					
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科					
Leguminosae	マメ科	1			2	3
Nonarboreal pollen	草本花粉					
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属					
Alisma	サジオモダカ属		1			
Gramineae	イネ科	221	141	282	280	260
Oryza type	イネ属型	9	14	4	8	14
Cyperaceae	カヤツリグサ科	3	4	8	14	
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節	1	2	1	1	3
Fagopyrum	ソバ属	8	2	4	4	5
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	9	9	12	7	10
Caryophyllaceae	ナデシコ科	5	9	6	4	8
Ranunculus	キンポウゲ属			1		
Cruciferae	アブラナ科	8	12	9	8	16
Sanguisorba	ワレモコウ属		1			
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属-フサモ属				1	1
Hydrocetyloideae	チドメグサ亜科			1		
Apiodeae	セリ亜科				2	2
Labiatae	シソ科	1		2		
Plantago	オオバコ属	1				1
Valerianaceae	オミナエシ科	1	1	1		
Lactucoideae	タンポポ亜科	6	4	3	2	2
Asteroideae	キク亜科	2	3	3	4	4
Xanthium	オナモミ属			1		
Artemisia	ヨモギ属	19	16	26	32	20
Carthamus tinctorius	ベニバナ					
Fern spore	シダ植物胞子					
Monolate type spore	単条溝胞子	2	12	2	3	4
Trilate type spore	三条溝胞子	2	2	3	1	
Arboreal pollen	樹木花粉	58	11	41	22	38
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	1	0	0	2	3
Nonarboreal pollen	草本花粉	294	219	364	367	346
Total pollen	花粉総数	353	230	405	391	387
	試料1cc中の寄生虫卵密度	1.1×10^{4}	2.1×10^{3}	2.1×10^{4}	4.4×10^{4}	1.7×10^{4}
Unknown pollen	未同定花粉	8	0	5	1	4
Fern spore	シダ植物胞子	4	14	5	4	4

表3　祇園町遺跡における花粉分析結果(2)

分類群		3-S5(湿地?)	4-S3（埋甕）	
学名	和名	23層	埋土上	埋土下
Arboreal pollen	樹木花粉			
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	44		
Cryptomeria japonica	スギ	2		1
Betula	カバノキ属			
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ	1		
Castanea crenata	クリ	7		
Castanopsis	シイ属	2		
Fagus	ブナ属	1		
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	6		
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	12	1	
Zanthoxylum	サンショウ属	1		
Vitis	ブドウ属			
Parthenocissus tricuspidata	ツタ			
Ericaceae	ツツジ科			
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属-ガマズミ属			
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	2		
Leguminosae	マメ科			
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属	1		
Alisma	サジオモダカ属			
Gramineae	イネ科	196	2	1
Oryza type	イネ属型	5	1	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	9		
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節	7		
Fagopyrum	ソバ属	6		1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	51		1
Caryophyllaceae	ナデシコ科	20	1	1
Ranunculus	キンポウゲ属	1		
Cruciferae	アブラナ科	8	3	4
Sanguisorba	ワレモコウ属			
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属-フサモ属			
Hydrocetyloideae	チドメグサ亜科	2		
Apiodeae	セリ亜科	1		
Labiatae	シソ科			
Plantago	オオバコ属			
Valerianaceae	オミナエシ科			
Lactucoideae	タンポポ亜科	2	1	1
Asteroideae	キク亜科	4		
Xanthium	オナモミ属			
Artemisia	ヨモギ属	25		7
Carthamus tinctorius	ベニバナ	2		
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	単条溝胞子	17	13	5
Trilate type spore	三条溝胞子	10	1	1
Arboreal pollen	樹木花粉	76	1	1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	2	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	340	8	16
Total pollen	花粉総数	418	9	17
	試料1cc中の寄生虫卵密度	5.0×10^{3}	7.2×10^{1}	1.5×10^{2}
Unknown pollen	未同定花粉	7	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	270	14	6

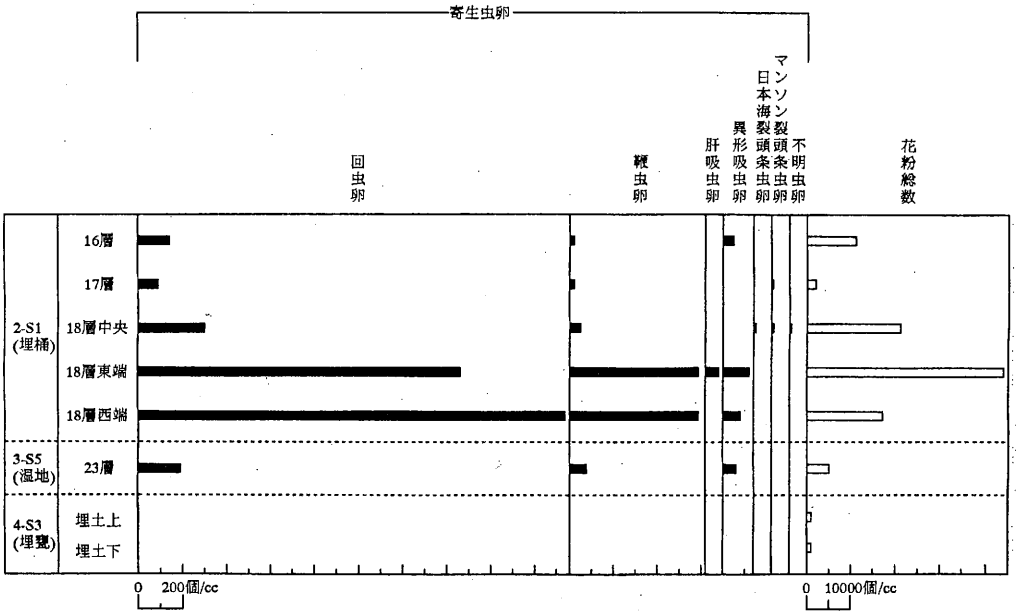


図１　祇園町遺跡、2-S1・3-S5における寄生虫卵分析ダイアグラム

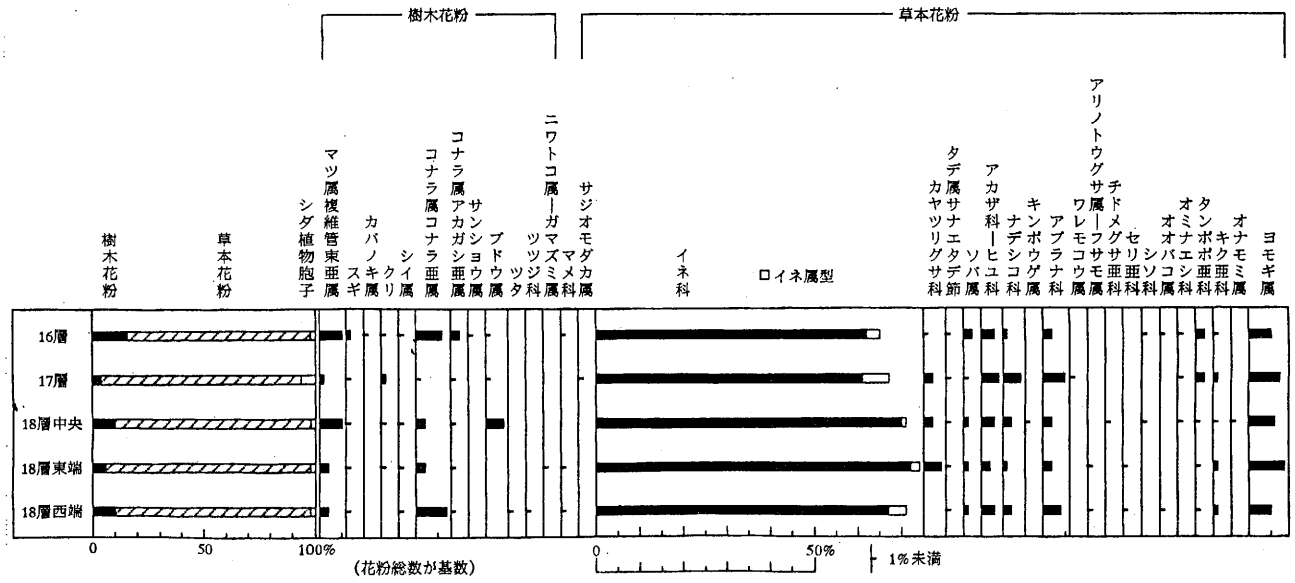


図２　祇園町遺跡、2-S1における花粉ダイアグラム

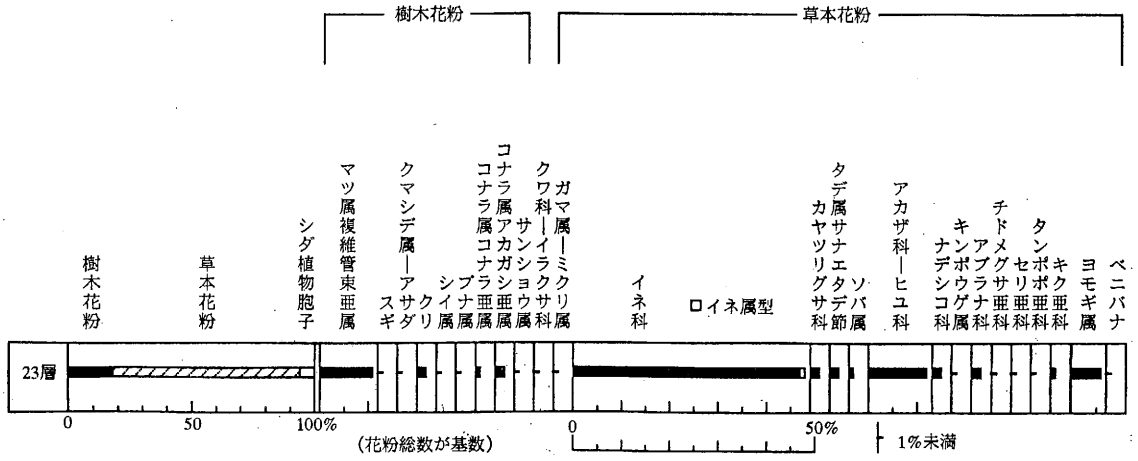


図３　祇園町遺跡、3-S5における花粉ダイアグラム

表4　祇園町遺跡種実同定結果

分類群			2-S1-16層	2-S1-17層	2-S1-18層(西)	3-S5-23層
学名	和名	部位	(200cc中)	(200cc中)	(200cc中)	(180cc中)
arbor	樹木					
Rubus	キイチゴ属	核	1		1	
Eurya	ヒサカキ属	種子	1			
herb	草本					
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	2		3	4
Chenopodium	アカザ属	種子	1			6
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子				25
Oxalis	カタバミ属	種子				2
Solanaceae	ナス科	種子				2
Cucumis melo L.	ウリ類	種子			1	
Eclipta prostrata L.	タカサブロウ	果実				1
Compositae	キク科	果実				1
Total	合計		5	0	5	41
Unknown	不明		1	0	2	2

表5　祇園町遺跡出土炭化種実の同定結果

試料	分類群	重量（g）	備考
3-S2		1.39	繊維塊
3-S3-3		77.35	土器片
3-S5-A		1.83	植物遺体片
3-S5-B		1.14	植物遺体片
3-11	イネ Oryza sativa L.果実？	19.39	
4-S2-22-A	イネ Oryza sativa L.果実	70.50	炭化材片付着
4-S2-24-A	ヒエ Echinochloa utilis Ohwi et Yabuno 果実	119.81	
4-S2-24	ヒエ Echinochloa utilis Ohwi et Yabuno 果実	11.50	
4-S2-28-A	イネ Oryza sativa L.果実	21.88	炭化材片付着
4-S2-28	イネ Oryza sativa L.果実	101.12	
4-S2-28	イネ Oryza sativa L.果実	8.22	礫混じり
4-S2-29-A	イネ Oryza sativa L.果実	60.31	
4-S2-29	イネ Oryza sativa L.果実	8.14	
4-S2-30	イネ Oryza sativa L.果実	88.05	礫混じり
4-S2-30	イネ Oryza sativa L.果実	117.78	礫混じり
4-S2-31-A	イネ Oryza sativa L.果実？	105.64	
4-S2-31-B	イネ Oryza sativa L.果実	14.71	炭化材片付着
4-S2-31	イネ Oryza sativa L.果実	72.59	
4-S2-31	イネ Oryza sativa L.果実	52.11	礫混じり
4-S2-32	イネ Oryza sativa L.果実	9.08	
4-S2-32	イネ Oryza sativa L.果実	34.49	礫混じり
4-S2-38-A	イネ Oryza sativa L.果実	9.13	炭化材片付着
4-S2-38-B	イネ Oryza sativa L.果実？	20.07	
4-S2-38-C	イネ Oryza sativa L.果実	12.62	
4-S2-38	イネ Oryza sativa L.果実	35.74	炭化材片付着
4-S2-38	イネ Oryza sativa L.果実	30.04	礫混じり
4-S2-46-A	イネ Oryza sativa L.果実	126.60	炭化材片付着
4-S2-46-B	イネ Oryza sativa L.果実	89.95	
4-S2-46-C	イネ Oryza sativa L.果実？	16.29	
4-S2-46-D	イネ Oryza sativa L.果実	33.25	
4-S2-46	イネ Oryza sativa L.果実	93.51	炭化材片付着

表6　祇園町遺跡出土炭化材の樹種同定結果

試　料（取り上げNo.）	樹　種　（和名／学名）	
4－S2－22A	マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*
4－S2－28A	マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*
4－S2－29	不明	unknown
4－S2－30	マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*
4－S2－31A	マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*
4－S2－38A	マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*
4－S2－46A	マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*